大正國語讀本

修正版

巻七

375.9
H019
資料室

42019
教科書文庫
4
810
H-1918.
200030
2243

資料室
375.9
H019

大正七年十二月二十壹日
文部省檢定濟
中學校國語科教科用

保科孝一編 修正版

大正國語讀本

東京帝國大學圖書之印

東京 合資會社育英書院發兌

廣島大學教 38327 圖書

大正國語讀本（修正版）卷七

目次

一 我が國土……（國民道德要領）……一
二 常陸帶……藤田東湖……七
三 晩春の別離（韻文）……島崎藤村……一五
四 奥の細道……松尾芭蕉……一九
五 百蟲の譜……横井也有……二八
六 泰山に登る……澁川玄耳……三一
七 爲朝の軍議……（保元物語）……四〇
八 白河殿夜討……（保元物語）……四八

九　エマーソンの片影……（東西六千年）…五七
一〇　妹にさとすその一（候文）……吉田松陰…六〇
一一　妹にさとすその二……六六
一二　小野の深雪……落合直文…七〇
一三　玉かつま抄……本居宣長…七七
一四　方丈記抄……鴨長明…八三
一五　俚諺論……大西祝…八八
一六　詩人スコット……鹽井雨江…九四
一七　詩人の像に（韻文）……武島羽衣…一〇一
一八　古今集の歌（韻文）……（古今集）…一〇五
一九　千返讀（候文）……雨森芳洲…一〇八

二〇　瀧の川その一……瀧澤馬琴…一一二
二一　瀧の川その二……一一七
二二　大原御幸……（平家物語）…一二四
二三　平重盛論その一……高山樗牛…一三三
二四　平重盛論その二……一三八
二五　白石と宣長……上田萬年…一四二

東京帝國大學圖書之印

大正國語讀本（修正版）卷七

一　わが國土

一　わが國土

抑、一國民の文明といふものは、人種に固有した氣稟が、其の生活して居る國土の地質・地勢・動植物・氣候など、所謂外圍の影響を受けて、人種性を形づくり、更に他人種との衝突又は調和に依つて、國民性を形作り、國家・社會の體制の定まる頃から、開けて來るのである。其の開けた文明は個人的勢力の活動が加り、他人種又は外國文明が影響して進化するの

German　Mesopotamia
Slaves　Egypt
France　Græcia
Greece

であるから、我が國民道德の由來を究めようと思へば、先づ我が國土と人種とに就いて考察せねばならぬ。

地質・地勢・氣候・生物等は未開時代に在つては、必然に人種の氣稟に影響を及し、又其の影響は特に顯著なものである。例へば競敵たる生物の勢力が強大であれば、人種の開化を妨げ、食料たる生物が豐かであれば、開化を促進するの類である。黃河沿岸や、恒河・印度河流域や、*メソポタミヤ平原や、*エジプト・*ギリシアなどの早く開けたのは、孰れも國土の恩惠が豐かであつたからである。*ゲルマン人種又は*スラヴ人種などの北歐民族が、深沈で思慮に富み、音樂などに長じ、割合に主觀的生活の方に發達して居るのに反して、*フラン

Italia
(Italy)

ス人、*イタリア人などの南歐民族が、快活で輕浮で、同じ美術でも彫刻又は繪畫に長じて、割合に客觀的生活の方に發達して居るのは、氣候が寒くて景色の荒寥たると、氣候が溫暖で、景色の多趣味であるとの相違に由來することが少くなからうと思はれる。

日本の國土は山が多くて、大體細長い島國であるから、沃野千里といふ樣な大規模の平野は無いが、小さいながら河が到る處に流れて、水量も豐富であるから、小沃野は至る處に開けてゐる。それ故最も農耕に適して居つて、生活は割合に困難でない。加之、熱帶地方や、其の他の大陸地方に見るやうな猛獸・毒蛇の類は無く、有益又は無害の動物が多く、植

物も有用なものが多くて、人に衣食住の原料を供給するばかりでなく、氣候も寒暑、中を得て、雨量も少くないから、實に天然の樂土と言つてよい程で、人は安樂に生を送ることが出來る。　其の上、四面海に圍まれて海洋・港灣に富み、河江・山巒が相交り、田野も其の間に開け、森林も各地に繁茂して居るといふ有樣であるから、日本の國土は實に多種多樣であり、其の景色の佳なることも世界に比類が少い。　斯かる國土が、客觀的・現實的・經驗的・感覺的なる我が人種性を作る因緣となつたことは、頗る多かつたに違ひない。

我が國の島國であることが、亦我が文明の進步に大なる利害關係がある。　島國である爲に雄大な自然界の勢力に壓

迫されることが少くて、人種性をして快活で樂天的ならしめるに與つて力があるが、其の代り大規模な文明が開けにくい。　また島國である爲に、大陸文明の影響を受けることが遲い。　遲い代りに、批判して取捨する餘裕があるから、大陸文明の弊を受ける事も少い。　而も島國である爲に他動的に大陸文明の影響を受ける事が少いから、自動的に之を採入れなければならなかつたが、本來進取の氣性に富んだ吾人の先祖の事であるから、少くも上古にあつては甚だしい不便はなかつた。　尙島國であつた爲に、最も利益したことは、外國の侵略を蒙ることが少く、人種の移動の多くなかつたことである。　同じ島國でもイギリスなどは、眞に一衣

Asia

帶水を隔てゝ、大陸の諸強國があつたために、はやく大陸文明を採入れることが出來たといふ利益もあつたが、其の代り絶えず大陸諸島の侵略を蒙り、また人種の出入が多かつた。從つて人種・宗教・言語も複雜になつて、精神上・社會上、國民統一といふことが充分に行はれぬ。我が國のアジア大陸に對する關係は之と頗る趣を異にして居つて、國家の危急を感ずるといふことが誠に少くて、平和な間に發達を遂げ、國内の統一もよく行はれた。我が國民が萬世一系の皇室を戴き、民族の純一性を保ち、天下を一家として、鞏固な團結を作る事の出來たのは、卓絶無比な國體と、皇祖皇宗の御稜威と、歷代の御偉業とに因ることは勿論であるが、我が國

が大陸から懸離れて居るといふ事が、また大に之を助けて居るのである。（國民道德要領）

二　常陸帶

藤田東湖

「東路の道のはてなる常陸帶、かごとばかりも逢はむとぞ思ふ。」といへる古歌の心は、別れにし人を慕ひて、暫しだに逢はまほしといふことを、帶のあなた此方と別れても、廻りあひて結ふことなるにかけてよめるなるべし。父子の情、朋友の道かくの如し。臣として君を慕ふ心はた然らざらむや。過ぎにし己丑の年、中納言の君世を繼がせ給ひし時、彪歲二十ばかりにて、皇國の史を考へ定むるわざしてありけるを、

東路の云々　新古今集に讀人知らずとして載せらる。

己丑の年　仁孝天皇文政十二年（一八二九）

中納言の君　德川齊昭。

江戸小石川なる館　今砲兵工廠のある處に在りき。

明くる年、青人草をなで治むるつかさをおふせて、江戸小石川なる館に召され、始めて君ををろがみ奉りけるに、彪がつかさの事、いとねもごろに問はせ給ふ。しかのみならず、忠孝の義を昭かにし、文武の道を勵まし、祖宗の遺意を繼ぎ、東照宮の恩賞に報いて、天つ日嗣を天地と共に仰ぎ奉りて、豐葦原の中つ國を、常磐に堅磐に守りなむと志し給ふ御事まで、仰せをかしこみ、種々のたまものなどして、故郷にまかりぬ。これをはじめとして、辱くも、屢、御書下し賜りて、政を正しうし、惠を施し、足引の山里に住める賤の男までも、安く樂しみて世を渡るばかりの、さまになしなむことを、はかり給ふぞかしこき。

庚子の年　仁孝天皇天保十一年（一八四〇）

大將軍の君　十二代將軍德川家慶。

右大將の君　家慶の弟家定。

去年の夏　孝明天皇天保十四年（一八四三）

三年ばかり過ぎたれば、彪つかさをかへて、御側近くつかへまゐらせ、又四年ばかり、過ぎぬれば、つかさをかへて、政の末にたづさはりたれど、身の程なほ賤しくてありしを、又、五年ばかりの後、おほせを蒙り、おほけなくも年寄若年寄などいへるつかさに續ぎて、政をものすることを司り、いにし庚子の年の春、君に從ひて、大城にまゐのぼり、かしこくも、大將軍の君と、右大將の君とを拜み奉り、君の御供して、故郷にかへりき。

去年の夏、君日光山に詣で給ひ、五月の中つ方、暇を乞ひたまひし時、彪も亦、大將軍の君と、右大將の君とを、拜み奉りけるに、五日ばかり過ぎぬれば、大將軍家、故らに、御使を以て、君を

呼び給ひ、何くれの事ほめ給ひて、黄金作りの御太刀に、種々の物添へて、君にまゐらせ給ふに、君も臣も悦び勇み、錦*着て晝行く心地して、故郷にかへりけり。

未*だ一年もすぎざる年の、卯月末つ方、君、暫し江戸に參り給ふべき旨、老中の人々仰せを傳へしに、君固より、大將軍を敬ひ給へば、彪等物もとりあへず御供して、小石川の御館に著せしは、五月五日の日、巳の時ばかりなりけり。人皆うれしき例を引きて、あやめ草あやめづらしと申し侍るに、思ひきや明くる日、君はやがて世を逃れ給ひて、駒*込なる御館に、こもり給ふべき仰せを、蒙り給はむとは。彪も何某等と共につかさを放たれ、籠りゐるべき仰せを畏まりぬ。彪等が身は、陌上の塵、濱の眞砂に等しければ、散りうせむも、浮き沈むも、ものの數ならねども、ひたすら忠孝・文武の道にのみ心を寄せ給ひて世にたぐひなき君の、いかにしてかゝる禍事に逢ひ給ふらむ。花を待つ梅が枝に、寒けき風吹くたぐひ、久方の月のすめるを、夜半の浮きくも立隱すためしにやあらむ。とにかくに、ことわりわかぬわざにて、悲憤とこそいはめ、慷慨とこそ思はめ。をりしも、五月雨いたく降りつづきて、いとどあはれを添へしが、月日經て、空は晴れぬれども、涙の袖は乾きだにせず、聞くもの見るものにつけて、君を慕ふ心は、いやまさりければ、草枕旅のやどりに、つくづくと、十年あまりの事を思ふに、或は豐榮昇る朝日の影に、兜の星を輝

錦着て云々　三國魏志に「張旣爲二雍州刺史一、太祖謂旣曰、還二君本州一、可レ謂二衣錦晝行一。」

未だ一年云々　弘化元年（一八四四）

駒込　東京市本郷區にあり。

治れる世に云々　易經繫辭傳に「君子安而不レ忘レ危、存而不レ忘レ亡、治而不レ忘レ亂。」

廣浦　常陸茨城郡涸沼の一名。

道弘むといふ館　即ち弘道館。

偕に樂しむといふ園　即ち偕樂園。

かし、若草萌ゆる春の野に駒の足を竝べて、治れる世に亂れを忘れざるためしを引き、秋風にかゝる隈なき月の夜は、樓船に棹さし出で、眺めも廣浦のもなかに、詩歌・管絃の興を催し給ひ、或は道弘むといふ館に、若きをのこ等に、文學び、槍・太刀使ふわざを教へ給ひ、或は偕に樂しむといふ園に、年高き人々を招きて、四方の景色に、心を慰め、物など賜ひて、老を養ふ故事を慕ひたまひ、或は霜の夜、雪のあした、山野に鷹狩して、御身をならはし、或は瓦の窻、繩のとぼそに到りて、貧しき民の情を知り給ふたぐひ、そのをり毎に、御そば近く侍りて、畏くも、御樂しみをも、御苦しみをも、與にし參らせしに、今は君も臣も、彼方・此方に籠りひそまりゐて、思ふ事、人づてもて

賤のをだまき云々　伊勢物語に「古の賤のをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな。」

寛平の政　宇多天皇の政事。

大塔皇子　護良親王。

聞えあげむことだに、協はぬ世となりぬれば、去年の五月の事は、夢にやありけむ、今年の五月のこと、現にはよもあるまじなど、賤のをだまき繰りかへし、昔を思ひ出づるまに〳〵書綴りて、君に見えぬる心地をなし、徒然を慰むる程に、水莖のあと積りて、机にみちぬれば、分ちて上下二卷となし、名づけて常陸帶といふ。

抑〻昔より、忠臣・孝子といはるゝ人の、世の禍に逢ひて、覺えず罪蒙れる者少からず。　異國の事は、擧げて數へ難く、又近き世の事は、憚あればいはず。　菅原の大臣は誠を盡して寛平の政を補ひたれども、讒者の爲に西のはてなる筑紫に赴き、大塔の皇子、身を盡して元弘の亂れを平げ給ひしかども、姦

臣の爲に東の鄙なる相模の窟に弑せられ給ふ。いとあさましく、いとつれなきわざにはあれど、年を經、世を重ぬるに從ひ、その名いやましに芳しく、百千年の今日まで、をさなきわらはべ、賤しき民までも、尊びかしこみぬるをもて見る時はわが君一たびはうき世の禍に逢ひ給ふとも、千年の後までも御名輝きて、萬代の鑑となり給はむことしるし。

しかはあれど、現の世に榮え明かならで、末遠き世を待ちなむ事、天が下の亂れたる時はさもこそあらめ、いま九重の空曇りなく、ますみの鏡明かにして、朝廷の御惠み至らぬ隈なく、萬の政邪なるを去りて、正しきに就き給ふこと、諸人の仰ぎ奉る所なれば、一度はさばへなす輩に任せ給ふとも、東照*す神の御靈のさきはへ給ひて、平かに廣く見はるかし給はむには、寒けき風やはらぎて、長閑かなる春の日に梅が色香見する如く、立ちおほへる浮雲消えうせて、さはやけき秋の夜に月の光さやけきがごとくに、我が君、もとより曇なき御心、殊に著しく、濁にしまぬ御身、殊にすが〳〵しくなりたまはむこと疑ふべくもあらず。さらば板びさし、雨もる假の宿りに、昔をしのびて涙に沈める賤が身も、曇れる眼おし拭ひ、そぼてる袂うち拂ひて、常陸帶のためしを引きて、再び君を拜み奉らむことのあらざらめやは。（常陸帶）

東照す神　東照宮卽ち德川家康。

三　晩春の別離

島崎藤村

時は暮行く春よりぞ　　また短きは無かるらむ
恨は友のわかれより　　さらに長きは無かるらむ
君を送りて花近き　　この高樓に來て見れば
綠に迷ふ鶯は　　霞空しく鳴きかへり
白き光は佐*保姫の　　春の車駕を照すかな
これより君は行く雲と　　ともに都を立ちいでて
懷へば琵琶の湖の　　岸の光にまよふとき
東、膽*吹の山高く　　西に大*比叡・比*良の峯
日は行通ふ山々の　　深きながめをふしあふぎ
いかにすぐれし想をか　　沈める波に湛ふらむ
流はむなし法*皇の　　夢かすかなる鴨の水

佐保姫　春の神、もと奈良の東なる地名に出づ。
膽吹の山　近江國阪田郡にあり。
大比叡・比良の峯　共に同國滋賀郡。
法皇　白河法皇。

水にうつろふ山城の　　みやびの都行く春の
霞める姿見つくして　　畿内に迫る伊賀・伊勢の
鈴*鹿の山の波遠く　　海に落つるを望む時
いかに萬の恨をば　　空行く鷲に極むらむ
春去り行かば青によし　　奈良の都に尋ね入り
年つき君がこひ慕ふ　　御堂のうちに遊ぶ時
古き藝術の花の香の　　伽藍の壁に遺りなば
いかに韻を身にしめて　　深き思に沈むらむ
扨は秋津の島が根の　　南のつばさ紀の國を
回りて進む黑潮の　　鳴門に落ちて行く所
天際遠く白き日の　　光をもらす雲裂けて

鈴鹿の山　伊賀・伊勢の二國と畿内との境界にある山嶺の總稱。

目ぢ遙かなる大海の　波の躍るを望むとき
いかに胷うつ音高く　君が血汐の騷ぐらむ
または名に負ふ歌枕　波に千とせの色映る
明石の浦の朝ぼらけ　松萬代の音に響く
舞子の濱の夕まぐれ　もしそれ海の雲落ちて
淡路の島の影くらく　狹霧のうちに鳴通ふ
千鳥の聲を聞く時は　いかに浦邊をさすらひて
とほき昔を偲ぶらむ　袂をわかつ夕まぐれ
さらば名殘はつきずとも　煙をふくむ藤のはな
見よかげ深き欄干に　霞に沈み鳴きかへり
北行く雁は大ぞらの

明石の浦
舞子の濱
共に播磨國明石郡の沿海にあり。

彩なす雲も愁ひつゝ　君を送るに似たりけり
あゝいつか又相逢うて　もとの契をあたゝめむ
すでに柳は深みどり　人はあかねど行く春を
いつまでこゝに留むべき　我に惜しむな家苞の
一枝の筆の花の色香を

（藤村詩集）

四　奥の細道

首　途

松尾芭蕉

月日は百代の過客にして、往きかふ年もまた旅人なり。船の上に生涯を泛べ、馬の口捉へて老を迎ふるものは日々旅にして旅を棲處とす。古人も多く旅に死せるあり。予も

月日は云々
李白の春夜宴桃李園序に「天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客。」

去年　元祿元年。
白河の關　磐城國白河郡古關村大字旗宿にあり、奥州の關門なり。
杉風　翁の門人、鯉屋藤左衛門といふ。
別墅　深川六間堀にありき。

いづれの年よりか、片雲の風に誘はれて漂泊の思やまず、海濱にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘の古巣を掃ひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えむと、そゞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて、取る物手につかず。股引の破れを綴り、笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより、松島の月、先づ心にかゝりて、住める方は人に讓り、杉風が別墅に移る。

松尾芭蕉

草の戸も住みかはる世ぞ雛の家

上野・谷中　共に東京市下谷區に屬す。
千住　武藏國南足立郡。東京の東北口。
草加　武藏國北足立郡。奥州街道にあたる。

彌生も末の七日曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれる物から、富士の峯かすかに見えて、上野・谷中の花の梢、またいつかはと心細し。睦まじき限りは宵より集ひて、船に乘りて送る。千住といふ所にて船をあがれば、前途三千里の思、胷に塞がりて、幻の巷に離別の泪をそゝぐ。

行く春や鳥啼き魚の眼は涙

これを矢立の始としてゆく道なほ進まず。人々は途中に立並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二年奥羽長途の行脚唯假初に思ひ立ち、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、若し生きて還らばと定めなき頼みの末をかけ、其の日漸く草加といふ宿に辿り着きにけり。痩骨

の肩にかゝれる物先づ苦しむ。唯身すがらにといでたち侍るを、紙衣一衣は夜の防ぎ、浴衣・雨具・墨・筆の類、あるはさりがたきはなむけなどしたるは、さすがに打捨て難くて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

いかで都へ云々
たよりあらばいかで都へつげやらむ、今日白河の關はこえぬと。（拾遺集、平兼盛）

秋風を云々
都をば霞と共に立ちしかど、秋風ぞ吹く白河の關。（後拾遺集、能因法師）

紅葉を云々
都にはまだ青葉にて見しかども、紅葉ちりしく白河の關。（千載集、源頼政）

卯の花の云々
見て過ぐる人しなければ卯の花の、咲けるかゝ垣根や白河の關。（千載集、藤原季通）

清輔
姓は藤原二條天皇の御代の人。

白河の關

心もとなき日數重るまゝに、白河の關にかゝりて旅心定まりぬ。いかで都へと便り求めしも理なり。中にも此の關は風騷の人、心をとゞむ。秋風を耳に殘し紅葉を俤にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に茨の花の咲きそひて、雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し衣裳を改めしことなど、清輔の筆にもとどめおかれしとぞ。

つぼのいしぶみ
一名多賀城碑。陸前國宮城郡多賀城村にあり。

壺碑

つぼのいしぶみは市川村多賀城にあり。高さ六尺餘、横三尺ばかりか。苔を穿ちて文字幽かなり。四維國界の里數を記す。「此城神龜元年歳次甲子、按察使兼鎮守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也。天平寶字六年歳次壬寅、參議東海・東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎮守將軍藤原惠美朝臣朝獦修造也。天平寶字六年十二月一日。」とあり。昔より詠みおきける歌枕多く語り傳ふと雖も、山崩れ川流れて道改り、石は埋れて土に隱れ、木は老いて若木にかはれば、時移り代變じて、その跡たしかならぬことのみなるを、疑もなき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す。行脚の

一徳、存命の悦、羇旅の勞を忘れて泪おつるばかりなり。

松島

抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭・西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里浙江の潮を湛ふ。島々の數を盡して、欹つものは天をさし、伏すものは波に匍匐ひ、あるは二重に重り三重に疊みて、左にわかれ右に連る。負へるあり抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の綠濃やかに、枝葉汐風に吹きたわみて、屈曲おのづから撓めたるが如し。ちはやぶる神代の昔、大山祇のなせる業にや、造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ辭を盡さむ。雄島が磯に立寄るほど月海に映りて晝の眺、又あらたまる。江

洞庭　支那湖南省の北にある大湖。
西湖　支那浙江省にある湖。
浙江　支那三江の一。浙江省東北部の灣なり。

上に歸りて宿を求め、窓を開きて風雲の中に旅寢するこそあやしきまで妙なる心地はせらるれ。

平泉

十二日平泉へとこゝろざし、あねはの松・緒だえの橋など聞き傳へて、人跡稀に、雉兎・芻蕘の往きかふ道そこともわかず。終にふみたがへて石卷といふ湊に出づ。黄金花咲くと詠みて奉りし金華山海上に見渡され、數百の廻船入江に集ひ、人家地を爭ひて、竈の煙立ちつづきたり。想ひかけずかゝる所にも來れるかなと宿借らんとすれど更に宿かす人なし。漸くまどしき小家に一夜を明して、明くればまた知らぬ道迷ひ行く。袖の渡・尾駮の牧・眞野の萱原などよそめに

平泉　陸中國西磐井郡にあり。
石卷　陸前國牡鹿郡にあり。
黄金花さく　すめろぎの御代榮えむとあづまなるみちのくやまにこがね花咲く。（萬葉集）
袖の渡　陸前國桃生郡橋浦村にあるものといふ。
尾駮の牧　詳かならず。
眞野の萱原　牡鹿郡大字眞野の地なりといふ。

長沼
陸前國登米郡新田村の東南にあり。一名新田沼。

戸伊摩
同郡登米町の事なるべし。

三代
清衡・基衡・秀衡。

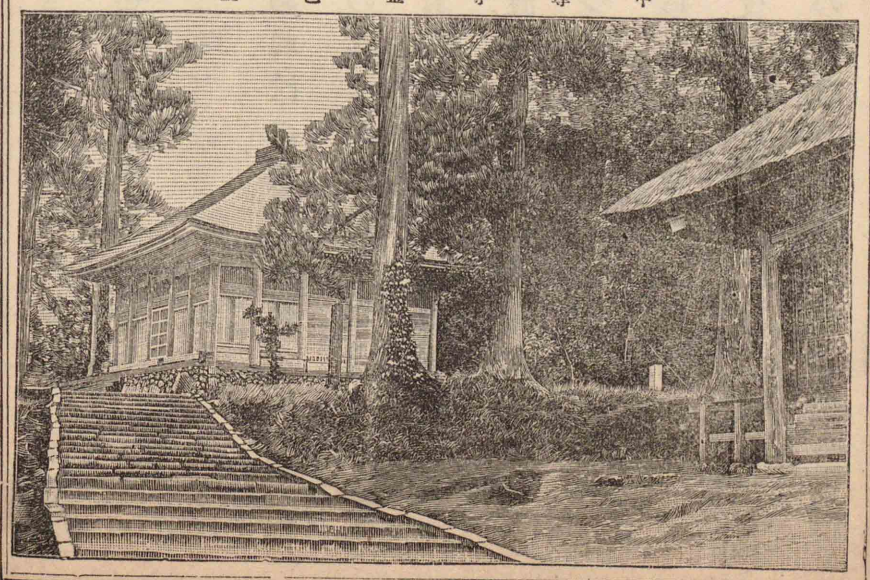
秀衡が跡
即ち平泉館址。奥御館と號す。

金雞山
秀衡が富士山に擬して造り、黄金製雌雄の雞を山上に埋め平泉の鎮護となしたるもの。

高館
衣川館。判官館ともいふ。義經の居住せる地。

見てはるかなる堤を行く。心細き長沼に沿うて戸伊摩といふ處に一宿して平泉に到る。その間二十餘里ほどと覺ゆ。三代の榮耀一炊の中にして、大門の跡は一里此方にあり。秀衡が跡は田野になりて、金鷄山のみ形を殘す。先づ高館にのぼれば北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は泉が城をめぐりて高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は衣が關を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷きて時の移るまで泪を落し侍りぬ。

中尊寺金色堂



泉が城
泉三郎忠衡の居城たるを以て此の名あり。

國破れて云々
國破山河在、城春草木深、感時花濺淚、恨別鳥驚心、烽火連三月、家書抵萬金、白頭搔更短、渾欲不勝簪（杜甫）

經堂
清衡建立。建武四年修理せしもの。

光堂
金色堂ともいふ。

夏草やつはものどもが夢の跡

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を遺し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散失せて珠の扉風に破れ、黄金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢となるべきを、四面新に圍ひ、甍を覆うて風雨を凌ぎ、姑く千歳の記念となれり。

五月雨の降りのこしてや光堂　（奥の細道に據る）

横井也有

五　百蟲譜

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものゝかぎりなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠にくるしむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周がゆめも、此のものには託しけめ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に跳んで、翁の目さましたれば、此の物の事さらにも誘りがたし。

莊周が夢　莊子夢に胡蝶となり、覺めて後莊周が胡蝶となりしか胡蝶が莊周になりしか判斷に苦めること莊子に見ゆ。

古今の序　花に鳴く鶯水にすむ蛙の聲きけば、生きとし生けるもの何れか歌をよまざりける と紀貫之のかける古今集の序にあり。

古池に　古池や蛙とびこむ水の音（芭蕉翁）

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やゝ日ざかりに啼きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙ともいふ事をきかず。此の物ばかり、初蟬と云はるゝこそ大いなる手がらなれ。やがて死ぬけしきは見えずと、此の物の上は翁の一句に盡きたりといふべし。

螢はたぐふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく五月の闇は、たゞこの物の爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧の學者にとられて、油火の代りにせられたるは、此のものの本意にあらざるべし。

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく頃ならむ。つくゝぼふしといふ蟬は、

やがて死ぬ云々　やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲（芭蕉翁）

貧の學者　晋の車胤をいふ。夏日練嚢を以て數千螢火を盛り、書を照らして之を讀めり。

つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死して、此の物になりたりと、世の諺にいへりけり。哀は蜀*魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蜀魂　蜀の望帝死す、化して鵑となり、春月晝夜悲鳴す、人望帝の魂といふ

蟻は明けくれにいそがしく、世の營みに隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐*安の都をのがれて、その身の安き事を得む。さるも、たよりあしきかたに穴をいとなみて、千*丈の堤を崩すべからず。きり〴〵すのつゞりさせとは、人のために夜寒を敎へ、藻に住む蟲は我からと、只身の上をなげくらむを、蓑蟲の父よと呼ぶは、守宮の妻を思ふには似ず。されど父のみ戀ひて、などかは母を慕はざるらむ。

槐安の都　淳于棼夢に槐安國に至る、即ち蟻の王國なり。

千丈の堤　韓非子に「千丈之隄以二螻蟻之穴一崩、百尺之室、以二突隙之煙一焚」

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃端居めづらしき夕はじめてほのかに聞きたらむ、又は長月の頃力なく殘りたるは、さびしきかたもあり。蚊屋釣りたる家のさま、蚊遣燒く里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七*賢の夜咄には、いかに團扇の隙なかりけむ。（鶉衣）

七賢　晉の阮籍・嵇康・山濤・劉伶・阮咸・向秀・王戎をいふ。

六　泰山に登る

澁川玄耳

泰*山に登つて、予はつく〴〵支那の舊國であることを今更ながら感じた。麓から絶頂まで四*十里、石疊と石段とで築いた幅二間以上の大道が開かれてある。而も其が治亂・興

泰山　支那山東省にある著名の山。五岳の一。四十里　日本の約五里。

亡定まりなき支那に於て、二十朝數千年を經て、儼然として維持されて居るといふに至つては一の奇蹟と謂はねばならぬ。「山は泰山より大なるは莫く、史も亦泰山より古きは莫し。」と謂はれてゐる。

支那の古文明は今の河南省を中心とせる黃河流域に開け、周・秦・漢を經て、一は淮*水に沿うて東海に、一は漢水を下つて南楊子江流域に普及せられた。周代以前に於ける歷代の帝都を考ふれば、其の勢力範圍は略〻想像せられるが、大略に言へば洛陽を中心として、四方へ各〻千里ぐらゐのものである。此の河洛平原は、東南に開けた廣漠たる沃野で、漢民族は繁殖するに從つて、漸次其の方面へ發展したのである。

淮水　河南省に發し、安徽省を貫流し、江蘇省にて黃海に注ぐ。
漢水　陝西省に發し、湖北省を貫流し、漢口に至りて揚子江に注ぐ。
千里　日本の約百五十里。

而して其の東方の行手を遮るのは泰山であつた。洪水が來れば滔々として際涯なく、千里の林野悉く魚龍の棲居となる。斯樣な低窪な廣原の地平線上に、巍峨として聳えたのが即ち泰山である。日本で譬ふれば武州・野州の平原から筑波山を望む樣なもので、さして高いといふのではないが、附近の關係からして、如何にも目立つて高くも尊くも思はれるのである。

泰山の高さは其の絕頂が一千五百八十米突で、富*士山の半ばにも及ばぬ。纔かに阿*蘇・霧*島などゝ似たものである。併しながら五千年來支那文明に關する數多の事蹟が、此の山に關聯して、一代は一代より愈〻名高いものにしてしまつ

筑波山　常陸國に在り。
富士山　駿甲二州に跨る。海拔三七三九米突。
阿蘇　肥後の北東部にある活火山。一二二五米突。
霧島　日向・大隅の境に蟠る群集火山。海拔一五四四米突。

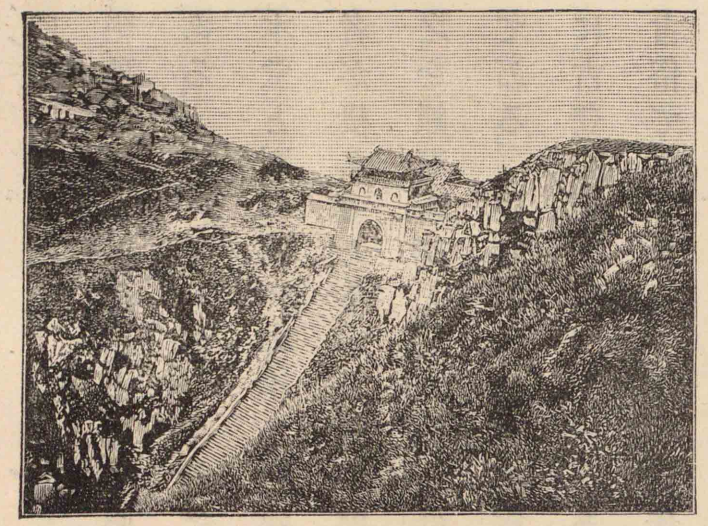
た。予は本年の夏に一度登山して非常の興味を感じ、更に種々の準備を整へて仲秋を以て再び登山し、併せて其の附近の古蹟を訪ひなどして二週間餘を費したが、到底半月や一月で十分の探査など出來るものでは無い。

「孔子泰山に登つて天下を小なりとす。」といふことが傳はつてゐる。富士でも筑波でも登臨の觀は何處でも同樣で、平將門が比叡山より平安城を瞰下して非望を起したといふのも、亦つまり同一の感じから來たのである。泰山の頂上の眺望は、先づ東北一帶は山脈が連亙して、富士から甲信地方を見るのと略同じである。西と南は黃河及び淮河の流域たる大平原で、孔子が一生を費して周遊彷徨した齊・魯・宋・

孔子泰山に云々　孟子、盡心章句上に、「孔子登二東山一而小レ魯、登二泰山一而小二天下一。」

平將門云々　日本外史に「將門與二藤原純友一善。嘗同登比叡山、俯二瞰皇城一曰、壯哉大丈夫不レ當レ宅レ之邪、遂與謀レ反。」

陳・蔡の野は眼下に展開して、其の間に汶水・泗水・沂水及び黃河の流が帶の如く繩の如く縺れ合つて、數多の大湖・小湖が鏡の如く光つて居る。處處の城邑・籬落が其の間に點點として居る樣を見、彼の中に權力を競ひ境界を爭ひ、智に誇り愚を罵り、怨みつ泣きつして居るかと思へば、何人と雖も人生の馬鹿々々しさを感じて、一寸仙人氣味にならざるを得ないのである。同



泰山頂上南天門

時に又猛然として將門流の野心が勃發して來る人もあるのであらう。

絶頂は俗に玉皇頂と稱せられる。玉皇の廟があるからである。百坪足らずの平地に塀を繞らして、其の内に玉皇の本堂と別に四棟の小さい建物がある。二三の道士や雜役者が棲んでゐる。本堂の前に石欄で圍つた大塊石がある、之を巔石と稱し、底つ岩根に通ずる神聖なるものと尊崇してゐる。併し、明時代に掘露したものだといふ。本堂の傍に「古登封臺」と刻つた碑がある。封禪といふことは支那の古俗で、主權者の一種の廣告である。此の泰山の上に土を築き上げて壇を作り、天を祭るのを封といひ、泰山の麓の小

齊の桓公
五霸の隨一。

山に土をならして地を祭るのを禪といふ。此は王者でなくては出來ない祭祀の禮である。何時の代に如何なる理由で始つたものかは解らないが、兎も角古い習慣で、周末に齊*の桓公が今の山東省を根據として威を四方に張り、天下の諸侯を會して覇を稱した時、此の封禪を行つて尊嚴を示さうとした。勿論泰山は齊の領分に在つた。しかるに宰相の管仲は之に反對して、天命を受けた帝王でなければ、封禪は出來ないと言つて、古の例を擧げたのが、無懷氏・伏羲・神農・炎帝・黄帝・顓頊・帝嚳・堯・舜・禹・湯・周の成王の十二である。孔子が泰山に登つて、姓を易へて王たるものを觀たのに、其の蹟のかぞへられるのが七十餘で、其の外かぞへ得られぬの

が萬以上もあつたといふ。何時の代にも廣告利用者は澤山有つたものと見える。それがいま實際を見ると、泰山の上に封の蹟と見るべきものは何も殘つて居ない。此の絶頂の古登封臺と碑のあるところも何等の特徴はないのである。

玉皇廟の門前階段の下に、秦の無字碑といふのが立つてゐる。秦の始皇が立てたといふ傳説である。幅が三尺六寸厚さ二尺、高さ一丈五尺五寸の大きな石柱で、上に蓋が載せてある、堅緻な質である。大抵な石が二三百年も風露に暴さるれば、分解を起して、表面はがさ〳〵になつたり、苔が附いたりするものであるが、此の碑は數千年を經て尚すべす

顧炎武　明の遺儒にして清に仕へず。考證の學を以て名聲を揚ぐ。

べと滑かな肌をして居る、一字も刻つてない、刻つたのが漫滅したのでも無いことは一見明かである。古來此の碑に就いて臆説區々で、或は、「此は碑ではない、其の中に必ず封禪の文書か或は金玉の類を藏してあるのだ。」といふ者もある。餘り疑を惹くので、或時代の地方官が撤去を命じた處が、之を動かさうとすると、驟かに風雷が起つたので、怖れて止めて了つたといふ傳説もある。清代に至つて、顧炎武といふ學者は史記の文に依つて、「此は疑もなく漢の武帝が立てたのである。最初は字を刻る積りであつたのが、つひ無字のまゝで殘つたのだ。」と考證し、今では之が定説に爲つて居るが、なほ多少の疑ふべき點はある。兎に角無字碑は泰山絶

頂の一怪物である。（故郷他郷）

七　爲朝の軍議

新院は、齋院の御所より、北殿へ遷らせ給ふ。左府は、車にて参り給ふ。白河殿より北、河原より東、春日の末にありければ、北殿とぞ申しける。南の大炊御門表に、東西に門二つあり。東の門をば、平馬助忠正承つて、父子五人竝に多田藏人大夫頼憲、都合二百餘騎にて固めたり。西の門をば六條判官爲義承つて、父子六人して、固めたり。その勢、百騎ばかりには過ぎざりけり。これこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝に附いて、多分は、内裏へ参りけり。こゝに、鎭西八郎爲朝は、「わ

新院　崇德上皇。
左府　左大臣藤原頼長。
父子五人　忠正と、その子長盛・忠綱・正綱・通正。
六條判官爲義　源義親の子。檢非違使尉となり、六條堀川に住みし故に、六條判官といふ。この時年六十一。

父子六人　爲義と、その子頼賢・頼仲・爲宗・爲成・爲仲。
鎭西八郎爲朝　この時年十八。
家弘　平氏。

れは親にも連るまじ、兄にも具すまじ。功名・不覺も紛れぬやうに、只一人、いかにも強からむ方へさし向け給へ。たとひ、千騎もあれ、萬騎もあれ、一方は射拂はむずるなり。」とぞ申しける。依つて西河原表の門をば固めたり。北の春日表の門をば、左衞門大夫家弘承つて、子供具して固めたり。その勢、百五十騎とぞ聞えし。

抑、爲朝一人として、殊更大事の門を固めたること、武勇天下に許されし故なり。件の男、器量、人に超え、心飽くまで剛にして、大力の强弓、矢つぎ早の手利なり。弓手の肘、馬手に四寸延びて、矢束をひくこと世に超えたり。幼少より不敵にして、兄にも所を置かず、傍若無人なりしかば、身に添へて都

鎮西　筑紫をいふ。

香椎の宮

に置きなば惡しかりなむとて、父不孝して十三の歳より、鎮西の方へ追下すに、豐後の國に居住し、尾張權守家遠をめのととし、肥後の國の阿曾平四郎忠景が子、三郎忠國が壻になつて、君よりも給はらぬ九國の總追捕使と號して、筑紫を從へむとしければ、菊池・原田を始めとして、所々に、城を構へて立て籠れば、その儀ならば、いで落して見せむとて、未だ、勢も附かざるに、忠國許りを案内者として、十三の歳の三月の末より、十五の歳の十月まで、大事の軍をすること二十餘度、城を落すこと數十箇所なり。　城を攻むる謀、敵を伐つ術、人に勝れて、三年が内に、九國を皆攻め落して、自ら總追捕使に押しなつて、惡行多かりけるにや、香椎の宮の神人等、都に上り、

筑前國糟屋郡にあり。今官幣大社。

宰府　大宰府の略。筑前國筑紫郡太宰府村に、その遺址あり。

訴へ申す間、いにし久壽元年十一月二十六日、德大寺中納言公能卿を上卿として、外記に仰せて宣旨を下さる。

源爲朝、久住宰府、忽諸朝憲、咸背綸言、梟惡頻聞、狼藉尤甚、早可令禁進其身、依宣旨執達如件。

然れども、爲朝、猶參洛せざりければ、おなじき二年四月三日、父爲義を解官せられて、前撿非違使になされたり。　爲朝、これを聞きて、「親の科に當り給ふらむこそあさましけれ。その儀ならば、われこそ、いかなる罪科にも行はれむずれ。」とて急ぎ上りければ、國人、共に上洛すべきよし申しけれども、大勢にて罷り上らむこと、上聞穩便ならずとて、形のごとくにつき從ふ兵ばかり召具しけり。　傅子の箭前拂の須藤九郎

家季、その兄隙間（スキマ）數（カズ）の惡七別當、手取（テトリ）の與次、同じき與三郎、三町礫の紀平次大夫、大矢の新三郎、越矢の源太、松浦二郎、左中次、吉田兵衞、打手の紀八、高間三郎、同じき四郎をはじめとして、二十八騎をぞ具したりける。依つて、去年より在京したりしを、父、不孝をゆるして、今度の御大事に召具しけるなり。

爲朝は八尺ばかりなる男の目角二つ切れたるが、紺地にいろいろの絲を以て獅子の丸を縫ひたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て縅したる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打つたるを着るまゝに、三尺五寸の太刀に熊の皮の尻鞘入れ、五人張の弓、長さ七尺五寸にて鈌（ツク）打ちたるに、三十六差したる黒羽の矢負ひ、兜をば郎等に持たせて、歩み出

樊噲・張良　二人とも支那の漢の高祖の臣。

吳子・孫子　吳起と孫武。共に支那の兵法家。

でたる體、樊噲（ハンクワイ）も斯くやと覺えてゆゝしかりき。謀は張良（チヤウリヤウ）にも劣らざれば、堅陣を破ること吳子（ゴシ）・孫子が難しとする所を得、弓は養由にも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸恐れずといふ事なし。上皇を始め參らせてあらゆる人々、音に聞ゆる爲朝見むとて擧り給ふ。

左府すなはち「合戰の趣計らひ申せ。」と宣ひければ、畏つて、「爲朝久しく鎭西に居住仕つて、九國の者ども從へ候について、大小の合戰數を知らず。中にも折角の合戰二十餘箇度なり。或は敵に圍まれて强陣を破り、或は城を攻めて敵を亡すにも、皆利を得ること夜討に如く事侍らず。然れば只今高松殿に押寄せ、三方に火を懸け、一方にて支へ候はむに、火

を遁れむ者は矢を免るべからず、矢を恐れむ者は火を遁るべからず。主上の御方心にくゝも候はず。但し兄にて候義朝などこそ駈け出でむずらめ、それも眞中指して射通し候ひなむ。まして清盛などがへろ〳〵矢なに程の事か候べき、鎧の袖にて拂ひ、蹴散らして捨てなむ。行幸他所へ成らば、御免されを蒙つて、御供の者少々射んずる程ならば、定めて駕輿丁も御輿を捨てて逃げ去り候はむずらむ。その時爲朝參り向ひ、行幸をこの御所へ成し奉り、君を御位に卽け參らせむこと、掌を反すごとくに候べし。主上を迎へ參らせむ事、爲朝矢二つ三つ放さむずるばかりにて、いまだ天の明けざらむ前に勝負を決せむ條、何の疑か候べき。」と憚る

富家殿
忠通・頼長の父忠實。

所もなく申しけり。左府聽き給ひて、「爲朝が申す樣、以ての外の荒儀なり、歳の若きが致す所か。夜討などいふ事、汝等が同士軍、十騎・二十騎の私事なり。さすが主上・上皇の御國爭に、源平數を盡して兩方にあつて勝負を決せむに、無下に然るべからず。その上、南都の衆徒を召さるゝ事あり、興福寺の信實・玄實等、吉野・十津河の指矢三町・遠矢八町といふ者どもを召具して、千餘騎にて參るが、今夜は宇治に著き、富家殿の見參に入り、曉此へ參るべし。彼等を待調へて合戰をば致すべし。また明日、院司の公卿・殿上人を催さむに、參らざる者どもをば死罪に行ふべし。首を刎ぬる事兩三人に及ばば、のこりはなどか參らざるべき。」と、仰せられければ、爲

朝上には承伏申して、御前を罷り立ちてつぶやきけるは、「和漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似ぬ事なれば、合戰の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御計らひ如何あらむ。義朝は武略の奥義を究めたる者なれば、定めて今夜寄せむとぞ仕り候らむ。明日までも延びばこそ、吉野法師も奈良大衆もいるべけれ。只今おし寄せて風上に火を懸けたらむには、戰ふともいかでか利あらむや。敵勝つに乘る程ならば、誰か一人安穩なるべき。口惜しきことかな。」とぞ申しける。（保元物語）

八　白河殿夜討

白河殿には、かくともしろしめさざりしかば、左大臣殿武者所の親久を召されて、「内裏の樣見て參れ。」と仰せければ、親久卽ち馳せ歸り、「官軍既に寄せ候。」と申しも果てぬに、先陣既に馳せ來る。その時、鎭西八郎申しけるは、「爲朝が千度申しつるは、こゝ候〳〵。」と忿りけれども、力及ばず。爲朝を勇ませむ爲にや、俄かに除目行はれて、藏人たるべき由仰せけり。八郎、「是は何といふ事ぞ。敵既に寄せ來るに、方々の手分をこそせられむずれ。只今の除目物騷なり。人々は何にもなり給へ。爲朝は今日の藏人と呼ばれても何かせむ。唯もとの鎭西八郎にて候はむ。」とぞ申しける。

安藝守清盛は三條を河原へ打出で、筋違に東河原に打渡り、

堤を上りに北へ向つてぞ歩ませける。その勢の中より五十騎許り、先陣に進んで押寄せたり。「こゝを固め給ふは誰人ぞ、名のらせ給へ。かく申すは、安藝守殿の郎等に伊勢國の住人古市伊藤武者景綱、同伊藤五、伊藤六。」とぞ名のりける。八郎これを聞き、「汝が主の清盛をだに合はぬ敵と思ふなり。平家は柏原天皇の御末なれども、時代ひさしくなり下れり。源氏は、誰かは知らぬ、清和天皇より爲朝までは九代なり。六孫王より七代、八幡殿の孫、六條判官爲義が八男、鎭西八郎爲朝ぞ。　景綱ならば引退け。」とぞ宣ひける。

柏原天皇　桓武天皇。

六孫王　源經基の事。

景綱「昔より源平兩家天下の武將として違勅の輩を討つに、兩家の郎等大將を射る事互に是あり。　同じ郎等ながら公家にも知られ參らせたる身なり。　下郎の射る矢立つか立たぬか、御覽ぜよ。」と、能つ引いて射たれども、爲朝之を事ともせず、「合はぬ敵と思へども、汝が詞の優しきに、矢一つ賜はむ、受けて見よ。　且は今生の面目又は後生の思ひ出にもせよ。」とて、三年竹の節近なるを少し押磨いて、山鳥の尾を以て矧ぎたるに、七寸五分の丸根の、箆中過ぎて箆代のあるを打食はせ、暫く保つてひようと射る。　眞先に進んだる伊藤六が胸板かけず射通し、餘る矢が伊藤五が射向の袖に裏かいてぞ立つたりける。　六郎は矢場に落ちて死にたりけり。伊藤五この矢を折りかけて、大將軍の前に參つて、「八郎御曹司の矢御覽候へ、凡夫の所爲とも覺え候はず。　六郎既に死

八幡殿　義家。
武則　姓は清原。

に候ひぬ。」と申せば、安藝守を始めて、この矢を見る兵ども皆舌を振つてぞ恐れける。　景綱申しけるは、「彼の先祖八幡殿、後三年の合戰の時、出羽國金澤の城にて、武則が申しけるは、『君の御矢に中る者鎧・兜を射通されずといふ事なし。　抑、君の御弓勢を慥かに拜み奉らばや。』と望みければ、義家、革よき鎧三領重ね、木の枝に懸けて、六重を射通し給ひければ、鬼神の變化とぞ恐れける。　これより彌、兵ども歸服しけりと、申し傳へて聞くばかりなり。　眼前にかゝる弓勢も侍るにや、あな怖ろし。」とぞおぢあへる。

かく口々にいはれて、大將宣ひけるは、「必ず清盛がこの門を承つて向ひたるにもあらず、何となく押寄せたるにてこそ

あれ。　何方へも寄せよかし。　さらば東の門か。」とあれば、兵皆「それもこの門近く候へば、もし同じ人や固めて候らむ。唯北の門へ向はせ給へ。」といへば、「さも言はれたり。　今は程なく夜も明けなむず。　然れば小勢に駈立てられむも見ぐるしかりなむ。」とてひき退く所に、嫡子中務少輔重盛、生年十九歳、赤地の錦の直垂に、澤瀉縅の鎧に、白星の兜を着、二十四差したる中黑の矢負ひ、二所籐の弓持つて、黄河原毛なる馬に乘り、進み出でて、「勅命を蒙りて罷り向ひたる者が、敵陣こはしとて引返す樣やあるべき。　續けや若者共。」とて、駈出でられけるを、清盛これを見て、「有るべうもなし。　あれ制せよ者ども。　爲朝が弓勢は目に見えたる事ぞかし、過ちすな。」と

宣ひければ、兵ども前に馳せふさがりければ、力なく、京極を上りに春日表の門へぞ寄せられける。

爰に安藝守の郎等に伊賀國の住人山田小三郎伊行といふは又なき剛の者、かたかは破りの野猪武者なるが、大將軍の引給ふを見て、「さればとて矢一筋に恐れて、向ひたる陣を引くことやある。たとひ筑紫八郎殿の矢なりとも、伊行が鎧はよも通らじ。五代傳へて軍に遭ふこと十五箇度、我が手に取つても度々多くの矢どもを受けしかど、未だ裏をばかかぬものを。人々見給へ、八郎殿の矢一つ受けて物語にせむ。」とて、駈出づれば、「をこの功名はせぬに如かず、無益なり。」と、同僚ども制すれども、元よりいひつる言葉を返さぬ男にて、

「夜明けて後に傍輩の『いで矢目見む。』といはむには、何とかその時答ふべき。然れば日頃の功名も失せなむ事の無念なれば、よし〳〵、人は續かずとも、おのれ證人に立つべし。」とて、下人一人相具して、黑革縅の鎧に、同じ毛の五枚兜を猪頸に着、十八差したる染羽の矢負ひ、塗籠籐の弓持ち、鹿毛なる馬に黑鞍置いて乘つたりけり。

門前に馬を駈けすゑ、「者その者にはあらねども、安藝守の郎等、伊賀國の住人山田小三郎伊行、生年二十八、公家にも知られ奉りし山田莊司行末が孫なり。山賊・强盜を搦め取る事は數を知らず、合戰の場にも度々に及んで、功名仕つたる者ぞかし。承り及ぶ八郎御曹司を一目見奉らばや。」と申しけ

れば、爲朝、「一定きやつは引設けてぞいふらむ、一の矢をば射させむず、二の矢を番はむ所を射落さむず。」と宣ひて、白蘆毛なる馬に、金覆輪の鞍置いて乘つたりけるが、驅けいでて、「鎭西八郎是に在り。」と名のり給ふ所を、本よりひき設けたる矢なれば、弦音高く切つて放つ。御曹司の弓手の草摺を縫ひざまにぞ射切つたる。一の矢を射損じて、二の矢を支ふる所を、爲朝能つ引いて、ひようと射る。山田小三郎が鞍の前輪より、鎧の草摺を尻輪かけて、矢先三寸餘りぞ射通したる。しばしは矢にかせがれて、溜るやうにぞ見えし。すなはち弓手の方へ眞さかさまに落つれば、鏃は鞍に留つて、馬は河原へ馳せゆけば、下人つと馳せより、主を肩に引懸けて、身方の陣へぞ歸りける。寄手の兵是を見て、愈〻此の門へ向ふ者こそなかりけれ。（保元物語）

九　エマーソンの片影

一、萬物は皆自ら自己の歷史を描く。轉岩は山に其の痕跡を殘し、河は土地に其の溝渠を通じ、動物は地層に其の骨を遺し、蕨は石炭に其の葉形を留む。

一、自己を信ぜよ。何人の心も此の鐵線に觸るれば鳴る。

一、俗世に於て俗世の說に從つて生活するは容易なり。野外に於て自己の說に從つて生活するは容易なり。英雄は之に反し、俗世に在りながら綽々として野外の獨立を

有するものなり。

一、人は何ぞ怯懦なるや。人は、「余は思ふ。」「余は此の如し。」と云ふ能はずして、數〻聖賢の語を引證するなり。何ぞ野花潤草を見ざる。彼等は自然の儘にして咲ふに非ずや。

一、人心の中に大なる海あり。人は之を知らずして他人に一杯の水を求む。

一、此の心歷史を作り、此の心歷史を讀む。人心は同一なり、永遠の一部なり。歷史は主觀的ならざるべからず。

一、我は宇宙の一部なり、宇宙は我の全體なり。故に我の智慧は宇宙の智慧なり、宇宙の本源より流出せる者なり。

一、人間の行爲は二なり、直接と思慮と。而して其の最も人

心を感ぜしむるものは直接の行爲なり。

一、差別を見るもの、事實と表面とを見る。才能及び事業の人、而して此の世界の人、實務の人なり。無差別を見るもの、萬物の一體を見る。信仰及び哲學の人、而して天才の人、理想に住む人なり。

一、原因は結果と分つべからず、方法は目的と分つべからず、種子は果實と分つべからず。結果は原因の中に存し、目的は方法の中に在り。

一、社會は新しき技藝を得たり、而も之と共に古き本能を失へり。

一、文明なる人民は車を造れり、而も之と共に脚の力を失へ

り。

一、グリーニチ*の星暦は發行せられたり、而れども人は星に就きて無智となれり。（山路彌吉―東西六千年）

Greenwich

一〇　妹にさとす　その一

吉田松陰

吉田松陰　名は矩方。長州の志士。

妹　松陰の長妹千代子。この書は安政六年四月十三日松陰が萩の野山の獄に在りて千代子に與へしもの。

この間は御文下され、觀音様の御洗米、三日の精進にて頂き候やうとの御事、御深切の御志感じ入り申候。精進、潔齋などは、隨分心のかたまり候ものにて宜しき事と存候に付、拙者も二月廿五日より三月晦日まで、少々志の候へば、酒肴ども一向食べ申さず候。その間一度靈神様御祭のもの頂戴致し候許りに御座候。ましして三日の精進はさまでむづかしき事にも之なく、御深切の事に候へば相果したく存候へども、當所にてはあたりまへの精進の外に又精進と申候うては、連中又は番人ども何故と怪しみ尋ね候に付、それをそれと相答へ候事面倒に存候故、八日より幸ひ、精進日なれば、その日一日に頂き申候。

吉田松陰

抑觀音様信仰せよとの事は、定めし禍をよけ候爲なるべく、

ちんぢ　長州の方言。微塵の意。

是には大いに論のあることに候へば、委細申進ずべく候。法華經第二十五の卷、普門品と申すに、觀音力と申す事高大に述べてこれあり候。大意は、觀音を念じ候へば、繩目に懸り候へば忽ちぶつ〳〵と繩が切れ、人屋へ捕はれ候へば忽ち錠・鍵が外れ、首の座へ直り候へば、忽ち刀がちんぢに折るなど申してこれあり候。是は拙者江戸の人屋にてこの經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終この趣に候。其故、凡人はこれより難有き事はなしとて信仰するも無理はなく候。

さりながら、佛の教は奇妙なる仕懸にて、大乘・小乘と二つに分ちて、小乘は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定

めこれあり候。小乘にて申候へば、觀音は右の經文の通りのものと心得、ひたもの信仰せしむる事に御座候。是は大に信を起さする爲なり。信を起すとは、一心に有難い事ぢやとのみ思ひ込み、餘念他慮なき事にて、一心不亂と申すもこの事なり。人は一心不亂になりだにせば、何事に臨み候うてもちつとも頓着なく、繩目も人屋も首の座も平氣になられ候故、世の中に、如何に難題・苦患の來るとも、それに退轉して不忠・不孝・無禮・無道等仕る氣遣はなし。されど、初より、凡夫に、一心不亂の、不退轉のと申聞かせても、少しも耳に入らぬもの故に、かりに觀音樣を拵へて人の信を起させ候教に御座候。これを方便とも申候。

扨又大乘と申す方にては、出世法と申す事が肝要に御座候。出世と申候うても、立身・出世など申す事には御座なく候。その初は、釋迦が天竺王の若殿に候ひし處、若き時より感の強き人にて、老人を見ては我が身も往くさきは老人にならむかと悲しみ、死人を見ては我が身も往くさきは死なむかと悲しみ、蟲けらの死にたる、草木の枯れたるまでに悲しみを發し、生老病死がこの世の習なれば、是非にこの世を出ねばすまずと志を立てゝ、年二十五の時位を棄てゝ山に入り、右の生老病死を免るゝ修行をしに參られ候。さ候うて三十出山とて、わづか五年の間に生老病死を免るゝ事を悟り、生れもせねば老いもせず、病みも死にもせぬ事を悟つて出

で來て、それより世の人を教化せられたり。是が即ち出世法なり。故に、出世せねば濟世の出來ぬと申すもこの事なり。濟世といふは、すなはちこの世の人を濟度することに御座候。

さてその死なずと申すは、近く申さば釋迦の、孔子のと申す御方は、今日まで生きて居らるゝ故、人が尊みもすれば難有がりもし、恐れもするなり。果して死なぬに候はずや。死なぬ人なれば、繩目も人屋も首の座も、前申す觀音經の通りには候はずや。楠木正成とか大石良雄とか申す人は、刃物に身を失はれ候へども、今以て生きて居らるゝなり。即ち刀のちんぢに折れたる證據なり。

一一　妹にさとす　その二

さてまた「禍福繩の如し。」といふ事を御悟なるが宜しく候。禍が福の種、福が禍の種に候。人間萬事塞翁が馬に御座候。拙者など、人屋にて死ぬる事に候へば、禍のやうなるものに候へども、また一方には學問も出來、己のため、人のため、後の世へものこり、かつ〳〵死なぬ人々の仲間入も出來候へば、福この上もなき事に候。人屋を出で候へば、また如何なる禍の來むも知れ申さず候。勿論、その禍の中にはまた福も交り候へども、所詮一生の間難儀だにせば、先には福あるべし、何の効驗もなき事に、觀音に賴みて福を求むるやうの事

七人兄弟

杉百合之助常道
- 杉民治
- 吉田寅次郎
- 杉千代子（兒玉兵衛門に嫁す）
- 杉壽子（小田村素太郎に嫁す）
- 杉艶子（天）
- 杉美和子（久坂義助に嫁す）
- 杉敏三郎

は、必ず〳〵無益に存候。尤も右の通に申候へば、身勝手なる申分、不孝なる申分と御存あるべきか、こゝにまた論あり。易の道は滿盈と申すことを大いに嫌ふなり。御互に七人兄弟の中、拙者は罪人、艶は夭折、敏は啞子、ふざまのわるきやうなるものなれど、あと四人はいづれも可なりに世を渡られ、特に兄様・そもじ・小田村は兩人づつも子供があれば不足は申されず。世の中の六七人も兄弟のある家を見くらべよ。これ程にも參らぬ家は多きものぞ。近くはそもじの家にても、高須などにても、兄弟の内にはわろき人も隨分あるなり。然れば父母・兄弟の代りに、拙者・艶・敏の三人が禍を受くるにこそと思ひ候

はゞ、父母様の御心も濟まるゝ譯には候はずや。　かつ杉は隨分多福の家なれば、拙者の身の上よりは、却つて杉が氣遣なる者なり。　拙者身の上は前に申す通り、つめが牢死、牢死しても死なぬ仲間なれば、後世の福は隨分あれど、杉は今にては御父子とも御役にて何の不足もなき中なれば、子供等がいつもこの様なるものと思ひて、昔山宅にて父様・母様の晝夜御苦勞なされたる事を話して聞かせても、眞とは思はぬ程なれば、この先、五十年七十年の事をとくと手を組んで案じて見られよ、氣遣なる者にては候はずや。　去年も端午に客の多きを、人はめでたし〳〵と嬉しき顏をすれど、拙者は何分先の先が氣遣にてたまらぬゆゑ、始終稽古場に屈み

山宅　杉常道隱棲の地。萩城の東方護國山麓に在り。

て、人の知らぬ處にては獨り落涙したる程の事なりき。若しや、萬一小太郎が父祖に似ぬやうになる事あらば、杉の家も危し〳〵。　父母様の御苦勞を知つて居るもの、兄弟にてもそもじまでぞ。　小田村にてすら山宅の事はよくは覺えて居るまじ。　まして久坂などは尙以ての事。　されば拙者の氣遣に觀音様を念ずるよりは、兄弟甥姪の間に「樂は苦の種、福は禍の本。」と申す事をとくと申聞かする方が肝要なり。　尙又一つ、拙者不孝ながら孝に當ることあり。　兄弟の內に一人にてもふざまのわろき人あれば、あとの兄弟も自然と心が和ぎて孝行するやうになり、兄弟も睦まじくなるものなり。　これより拙者は兄弟の代りにこの世の禍を受

小太郎　兄民治の子。

合ふゆゑ、兄弟中は拙者の代りに父母様へ孝行してくるゝがよし。さすれば、つゞまるところ兄弟中皆よくなりて、果は父母様の御仕合せ、また子供が見習ひ候へば、子孫の爲是程めでたき事はなきにあらずや。よく〳〵御勘辨候うて、小田村・久坂なんどへもこの文御見せ、佛法信仰はよき事なれど、佛法に迷はぬやうに、心學本なりと、折々御見候へかし。心學本に、

のどけさよ願なき身の神まうで
神へ願ふよりは身に行ふが宜しく候。（俗簡襍輯）

落合直文

一二　小野の深雪

在原業平
阿保親王の第五子。行平の弟。

惟喬親王
文德天皇の皇子、母は紀名虎の女靜子。

小野
山城葛野郡今の小野郷村。

貞觀十四年
清和天皇の年號、良房攝政の頃。（一三三）

糺の森
京都市の東北郊外、賀茂川と高野川と會合する處。

八瀨
山城愛宕郡に在る村。

大原
八瀨の北。

在*原業平は、惟*喬親王に親しう仕へまつれるものなり。如何にもしてこの親王を立て奉らばやと、心をくだきしかひもなく、藤原氏のほしいまゝなる振舞日につのりければ、その憤又遣らむ方なし。惟喬親王世をあぢきなきことに思して、ある夜密かに、御髪おろさせ給ふ。こを聞きまつれる業平の驚は如何にぞや。親王は、やがて小*野といふ處に庵室を結びて、其處に籠らせ給ふ。こは貞*觀十四年七月十一日の事とぞ聞えし。

あくる年の正月元日、業平新年の喜聞えまつらむとて、密かに出立つ。昨日今日降暮らしたる雪に、鴨河・糺*の森など、景色面白からぬにはあらねど、歌詠まむ心地もせず。八*瀨・大*

原わたりに、行通ふ細き山路、みな雪にうもれぬ。急ぎに急げど、心に任せず。松の木蔭に立寄りて、なほ行く方を眺むるに、比叡の山、雪ことに高し。その麓のわたり、炭竈の煙細う立上れり。それやがて、親王のおはする小野といふ處ならむ。この雪にさぞや埋もれてましまさむ。如何ばかり寒けくておはすらむ。早く行きて慰めまつらむと、己の寒さを忘れて、君をしのびまつる其の心は、降積る雪よりもげに深し。

行き〳〵て、ひるの程小野につきぬ。賤の女にあひて、「親王の御隱家はいづこ。」と問ふに、「かの雪に隱れたる松原の、その奥なり。」と答ふ。いふがまに〳〵分入りしに、此處よりは、賤

山がつの行通ひし跡もなし。風吹くごとに、松の梢より、雪のみだれ散り來る、いみじう寒し。或は下り、或は上り、路なき處を辿りつゝ、辛うじて親王のおはする庵室に至り著きぬ。訪ひ奉る人しなければ、雪に閉されたるまゝ門も開かず。奥の方に讀經の聲の微かに聞ゆるは、あるじの親王の、行ひ給ふなるべし。ほと〳〵と門を敲くに、老いたる下部出で來ぬ。「誰にかおはする。」とて門ひきあけぬ。「業平尋ね參れり。其の旨聞え申せ。」といふ。しばしありて、讀經の聲斷えぬと思ひしに、親王ははや緣に出でさせ給ふ。それと見奉るや、笠かいやり、疾く走り寄りて、「その御姿は。」と言ひたるまゝ、言葉も出でず。

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや
雪ふみ分けて君を見むとは

こはこれ、此のをりに詠める業平の歌なり。まこと、夢と思ひしならむ、夢と思ひしならむ。而も眞の夢ならば、覺むるをりのあらまし者を。げに夢よりもはかなき現なりや。親王少時の程は、御言葉も無かりしが、やゝありて、「よくこそたづね參りたれ、この雪に。」と仰せ給ふ。蓑脱ぎ棄てて、緣に上りしに、「その頭の雪はいかに。」とて、墨染の御袖もて打拂はせ給ふ。業平あまりの畏さに、緣にひれ伏しぬ。「こなたへ。」と宣ふまゝに、奥なる一間に通る。御床には佛像を掲げさせ給ひ、御經机には、讀みさし給へる御經など見ゆめり。親

王は、御脇息によらせ給ひ、「なほ近う。」と招かせ給ふ、御手の數珠いと麗しく、御香のかをりいみじう尊し。業平「かゝる雪ふみ分けて、かゝる處にたづね參らせて、かゝる御有樣を見奉ること、如何なる浮世に侍らむ。」と歎き申す。親王、「さる事は、言はむも何のかひあらむ。今日は元日なり。快く物語してむ。」と宣ふ。「さりとても、御いたはしの事や。こも皆藤原氏の仕業。業平此の世にあらむ限りは、とも角もして、御恨はらし參らせむ。」と言ひて、ふり濺ぐ熱き涙は、この寒さにも氷らざりしなるべし。

とかくする程に、早夕暮近うなりぬ。「この雪のはれ閒に、御暇仕らむ。」といふに、「今しばし。」とて止め給ふ。「今日は病のむ

ね朝廷に聞えあげ、忍び〳〵てたづね參らせしなれば、これにて御暇賜はらむ。」と申すに、親王もさのみは止めさせ給はず。業平「新年の公事など果てたらむには、又こそ訪ね參らせめ。朝夕、寒さを厭はせ給へ。」と聞え上げしに、「汝も路の程心してよ。」と宣ふ。

業平泣く〳〵御門を出でぬ。親王、端近う出で給ひて、見おくらせたまふ。折れめぐる路の隈に立ちとどまりて、顧みするをりしも、比叡山颪、さと吹き來て、又も降りしきるに、彼方は見えずなりぬ。此方も見えずなりたらむ。あな心なの此の雪や。（萩の家遺稿）

一三　玉かつま抄

本居宣長

一　儒者の皇國の事をば知らずとてある事

儒者に皇國の事を問ふには、知らずといひて恥とせず。から國の事を問ふに知らずといふをば痛く恥と思ひて、しらぬ事をも知り顔に言ひ紛はす。こは萬を唐めかさむとする餘りに、其の身をも漢人めかして、皇國をばよその國のごともてなさむとするなるべし。されど猶漢人にはあらず御國人なるに、儒者とあらむ者の、己が國の事しらであるべき業かは。但し皇國の人に對ひては、さあらむも漢人めきてよかんめれど、もし漢國人が問ひたらむには、「我はそなたの國の事はよく知れゝども、わが國の事は知らず。」とは、流石

にえいひたらじをや。若しさもいひたらむには、「己が國の事をだに得知らぬ儒者の、爭でか人の國の事をば知るべき」。とて、手をうちて痛く笑ひつべし。

二　手かく事

よろづよりも、手はよくかゝまほしきわざなり。歌よみがくもんなどする人は、ことに手あしくては、心おとりのせらるゝを、それ何かはくるしからむといふも、一わたりことわりはさることながら、なほあかずうちあはぬこゝちぞするや。のり長いとつたなくて、つねに筆とるたびに、いとくちをしういふかひなくおぼゆるを、人のこふまゝにおもなくたんざく一ひらなど、かき出でて見るにも、我ながらだにいとかたはに見ぐるしうかたくななるを、人いかに見るらむとはづかしくむねいたくて、わかゝりしほどに、などて手ならひはせざりけむと、いみじうくやしくなむ。

三　今の人の歌文ひが事多き事

ちかきよの人のは、うたも文も大かたはよろしと見ゆるにも、なほひがごとおほきぞかし。されどそのたがへるふしを見しれる人はたよになければ、たゞかいなでに、こゝかしこえんなることばをつかひ、よしめきてよみなしかきちらしたるをば、まことによしと見て、人のもてはやしほめたつれば、心をやりてしたりがほすめる、いとかたはらいたく、をこがましくさへぞおもはるゝ。さるにつけては、かくいふ

おのが物することも、なほいかにひがごとあらむと、物よく見しられむ人のこゝろぞはづかしかりける。　人のひがごとのよく見えわかるゝにつけては、我はよくわきまへたれば、ひがごとはせずと思ひほこれど、いにしへのことのこゝろをさとりしるすぢは、かぎりなきわざにしあれば、此の外あらじとは、いとなむさだめがたきわざなりける。

四　古よりも後世のまされる事

古よりも後世のまされること、萬の物にも事にも多し。　其の一つをいはむに、古は橘を雙なき物にしてめでつるを、近き世には、蜜柑といふ物ありて、此の蜜柑に較ぶれば、橘は數にもあらずけおされたり。　その外柑子・柚・九年母・橙などの類多き中に、蜜柑ぞ味殊に勝れて、中にも橘によく似て、こよなく勝れる物なり。　此の一つにて推して量るべし。　或は古にはなくて、今はある物も多く、古はわろくて、今にはよき類多し。　之をもて思へば、今より後も又いかにあらむ、今に勝れる物多く出で來べし。　今の心にて思へば、古は萬に事足らずあかぬ事多かりけむ。　されどその世にはさは覺えずやありけむ。　今より後また、物の多く良きが出で來む世には、今をもしか思ふべけれど今の人、事足らずとは覺えぬが如し。（玉かつま）

一四　方丈記抄

鴨長明

行く川の流は絶えずして、しかも本の水にあらず、よどみに浮ぶうたかたはかつ消えかつ結びて、久しくとどまることなし。世の中にある人と住家と亦かくの如し　玉敷の都の中に棟を竝べ甍を爭へる、尊き、卑しき人の住居は、代々を經て盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。處もかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は二三十人が中に僅かに一人二人なり。朝に死し、夕べにうまるゝならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人何方より來りて何方へ去る。又知らず、假の宿り誰が爲に心を惱まし、何

安元三年
即ち治承元年。（一八三七）

によりてか目を悅ばしむる。この主人と住家と無常を爭ひ去るさま、いはば朝顏の露に異ならず。あるは露おちて花殘れり。殘るといへども朝日に枯れぬ。あるは花は萎みて露なほ消えず。消えずと雖も夕べを待つ事なし。凡そ物の心を知りしより以來、四十あまりの春秋を送れる間に、世の不可思議を見ることやゝ度々になりぬ。去ぬる安元三年四月二十八日かとよ、風烈しく吹きて靜かならざりし夜、戌の時ばかり、都の巽より火出で來りて乾に至る。終には朱雀門・大極殿・大學寮・民部省まで移りて、一夜が間に塵灰となりにき。火本は樋口富小路とかや、病人を宿せる假屋より出で來けりとなむ。吹迷ふ風にとかく移り行く

ほどに、扇をひろげたるが如く末廣になりぬ。遠き家は煙にむせび、近き邊はひたすら焔を地に吹きつけたり。空には灰を吹きたてたれば、火の光に映りて普く紅なる中に、風に堪へず吹切られたる焔、飛ぶがごとくにして一二町を越えつゝ移り行く。その中の人、現心あらむや。或は煙にむせびて斃れ伏し、或は焔にまぐれて忽ちに死しぬ。或は又纔かに身一つ辛くして遁れたれども、資財を取出づるに及ばず、七珍・萬寶さながら灰燼となりにき。その費いくそばくぞ。このたび公卿の家十六燒けたり、ましてその外は數を知らず。すべて都の中三分の一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人、馬・牛の類邊際を知らず。人の營み皆愚かな

る中に、さしも危き京中の家を作るとて、寶を費し、心を惱ますことは、勝れてあぢきなくぞ侍るべき。

また治承四年卯月二十九日のころ、中御門京極のほどより大いなる辻風起りて、六條わたりまで嚴しく吹きけることは侍りき。三四町をかけて吹きまくるに、その中に籠れる家ども、大きなるも小さきも、一つとして破れざるはなし。さながら平に倒れたるものあり、桁・柱ばかり殘れるもあり。又門の上を吹放ちて四五町が外に置き、また垣を吹拂ひて鄰と一つになせり。況や家の内の寶、數を盡して空にあがり、檜皮葺の類、冬の木の葉の風に亂るゝがごとし。塵を煙のごとくに吹きたてたれば、すべて目も見えず。夥しく鳴

りどよむ音に、物いふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりとも、かばかりはとぞ覺ゆる。家の損亡せるのみならず、之を取繕ふ閒に身を害ひてかたはづけるもの數を知らず。この風、坤の方に移り行きて、多くの人の歎をなせり。辻風は常に吹くものなれど、かゝる事やはある。ただごとにあらず、さるべき物のさとしかなどぞ疑ひ侍りし。（方丈記）

一五　俚諺論　大西祝

epigram 警句。

羅馬の一詩人がエピグラム*を蜜蜂に譬へて「螫あり、蜜あり、軀は小さし。」と言へるは、すべての俚諺にとはいひがたきも、その最も巧妙なるものには恰當の語なるべし。俚諺の上乘なるものは多くはこの三者を具ふ。言短くして意義味ふべく、寸鐵人を刺すの妙あり。人口に膾炙し易からんことを求むる故に、俚諺はおのづから律語を爲す傾あり。我が國語にては五又は七が自らなる律呂なれば、我が國の俚諺にはこの律に從へるもの甚だ多し。「雉子も鳴かずばうたれまい。」「心の鬼が身を責める。」といふ如く、最もよく人口に膾炙せるものにして、七五の調子をなせるはいと多し。「人と屏風はすぐには立たぬ。」「思ふ念力、岩でも徹す。」「身を捨ててこそ浮む瀬もあれ。」などは七七の調子をなして語呂頗るよし。「十で神童、十五で才子、二十過ぎてはただの人。」といふも、その語に律あり。右と同じ理

由により、同語または同音を重ねたる類のものも多し。例へば「多勢に無勢。」「短氣は損氣。」「弱り目に祟り目。」「處かはれば品かはる。」「藥九層倍。」「勝つて兜の緒をしめよ。」といふが如し。かく律を成し、尾韻又は頭音を合はすこと、詩の句法に似たる所あるのみならず、俚諺に抽象の語少く、おほくは具體的に言ひなして感動の强からん事を求め、又これが爲に屢〻誇張の言を喜ぶなども、それが詩歌に似たる點なり。この故に、諺にて物の度量をいふには、その數又は量を定めていふを好む。「七たび搜して人を疑へ。」「人の噂も七十五日。」「預り物は半分の主。」などの類は數ふるに遑あらず。數の中にても最も好んで用ひらるゝは三の數なるべし。「三度目が

Paradox
逆語

定の目。」「三年たてば三つになる。」「懺悔話をすれば、三年の罪が滅びる。」「三人よれば文殊の智慧。」「三人よれば人中。」「朝起は三文の德。」その他なほ多かるべし。又「用心は臆病にせよ。」「黑犬にくはれて、灰の和滓(カス)におそれる。」などは、誇張していふにより てその意味を成せるものの例なるべし。

誇張を喜ぶと同じ理由を以て、俚諺は一見實しやかならぬ語句、卽ちパラドックス*を用ふるを喜ぶ。この種の諺に深く味ふべきもの少からず。「急がばまはれ。」「言はぬは言ふに勝る。」「逢ふは別のはじめ。」「兄弟は他人の始り。」「論語讀の論語知らず。」「人を使ふは、使はれる。」など、その例なるべし。かく相反するが如き事柄の中に、却つて相通ずる所あるを發見す

るは、深邃なる智慧の一特徴なり。

パラドックスといふにはあらずとも、總じて反對のものを相竝ぶるは、吾人の注意を捕ふる一方便なり。俚諺は總じて對照を喜ぶ。「骨折損の草臥儲。」「聞いて極樂、見て地獄。」「問ふは一旦の恥、問はぬは一生の恥。」「長者の萬燈より貧者の一燈。」などその例なり。

反對を竝ぶるのみならず、總じて二種の事柄を相竝べてそを比照するは俚諺の一大特色なり。これ俚諺の比喩に富める所以にして、その比喩の極めて妙なる、詩人の作としても恥しからぬものあり。俚諺の最も巧妙なるものは多くこの類にあり。いま思ひ出づるに從うてその三四の例を

掲げんか。「馬には乘りて見よ、人には添うて見よ。」「旅は道づれ、世はなさけ。」といふ如きは、幾たび唱するもその趣味の津津たるを覺ゆ。「花は櫻木、人は武士。」これ我が國民の以てそが理想を誇るに足るものの一なるべし。「佛法と藁屋の雨は出でて聞け。」「風流の心に富める國民ならで、誰かこれをえ言ひいでん。」これを口ずさみ見よ、如何に詩心・道心・宗教心の相結びてなせる高雅・幽玄なる妙趣の浮び來るぞ。

かく二つの事を竝べ出でて相比照することなく、唯普通の暗喩を用ひたるものも頗る多し。例へば、「商賣は牛の涎。」「祕事は睫。」といふが如し。而して更にその喩のみを掲げて、他の意味を匂はせたるものも、その數多かるべし。「蟹は甲に

似せて穴を掘る。」「目くそ、鼻くそを嗤ふ。」といふ如きはこの例なり。

かく比喩の用ひやうは數種あれど、そのこれを用ふるは寓言に於ける用ひ方とは同じからず。「目糞鼻糞を嗤ふ。」といふ如きは多少寓言に近よれる所あるが如く思はるれど、俚諺と寓言とは、後者は敍事(物語)の體裁を具へ、前者は然らざる點に於て全く相異なり。同じく意を寓して比喩を用ふるも、寓言はこれを出來事又は動作として語り、俚諺は時間に結ばずして、唯常恆の事實として語るなり。(大西博士全集)

一六　詩人スコット

鹽井雨江

Scott.
Scotland.

Edinburgh

層々と描き出づれば、筆端に峻嶺聳えて綠樹しげり、清流みなぎりて玉藻ながれ、舒々と說き來れば紙上には、霞たなびき、花咲きにほひ、月すみわたり、露ちりまどひ、奮然として文を行れば、言詞には刀槍閃き劍戟鳴る。げにも優しく、けだかく勇ましき文章家にして且詩人なるスコット氏。氏は英國スコットランドの人にて、千七百七十一年といふ年、八月といふ月、十五日といふ日に、エヂンバラといふ所にうまれたり。幼きよりいたつきに苦しむこと多く、二歲といふ歲の春、いかにやしけん右の足故なくて俄かに立たずなりぬ。八歲の時近きわたりの高等小學に入りしが、幾日もあらで、病は又烈しくなりて、言葉もえいはず、物もえくはず、月

幾月、日幾日、ひたなやみて過ぎぬ。程經て病は癒えたれど、紅顔の健康は又かへらず。それより七歳の春秋我が窓の月、我が軒の花、垂れこもりてのみ暮らしぬ。

さはいへ世界を動かし、人心を靡かしたる彼が文學の種子は誠に此の窓の月の下、此の軒の花の蔭に蒔かれたりといひなん。そは彼が面白からぬ病窓

つれ〴〵を慰めんものとてはただ古今の小説、古今の物語のみなりけり。かれは實に詩にまれ、歌にまれ、小説にまれ、實傳にまれ、さらんたぐひは、ありといふかぎり讀みあかし、讀みくらしたり。殊に英雄の物語、武士の小説を好みて讀みぬ。

あはれかれの文、かれの筆、武を描き士氣を寫すに秀でたるは、決して偶然にあらず。又垂れこめて、よその天唯思ふのみなれば、文學者詩人の骨髄ともいはん想像は、唯積みと積みて散りゆく隙はなかりけるらん。誠にかれの文詩の種子は、此の年月に蒔かれしといひなん。

かれの父は法律家なりけり。氏も十五歳の春より父に從

ひて、おなじ道を踏まんとせり。されどかれの愛するは文學の書、かれの思ふ所は文詩の趣向にして、詩歌に痛く心を傾けぬ。又折あれば、山川に杖を引き駒を馳せたり。あはれ、此の湖上の美人、山家の風景、湖邊の朝夕、寫し盡し、畫き得て、讀めば誠に身其の境にある心地するばかりの妙筆は、げに故なきにあらず。

スコットが初めて書きたるは、「北歐人民の風俗・習慣」といふ論文なりけり。さはいへ、初めて詩家といふ名を、世に知られんと思ひ立ちしは「ウイリアム*とヘレン」といふ獨逸詩の飜譯にして、此は千七百九十六年に出版せられたり。

其の後更に二三の飜譯を試みしが、千八百五年初めて「故伶

William and Helen

人の歌」といふ詩を創作してより、あはれ、スコット、あはれ、詩人といふ聲、高くなりぬ。

「マ*ーミオン」、「湖上の美人」、「ド*ン、ロデリック」、「ロ*ークバイ」などといふ詩、皆清く美しきが中に、一種卓絶の氣節を含み、益々出でゝ益、妙なりしかば、詩家てふ名は、尾上の奥、渡津海の外にも響きわたりぬ。然るに「豪*傑ハロルド」といふ作を出して、世評豫期の如くならず、加ふるにバ*イロンの詩名漸く彼を壓倒するに到りしかば、それより韻文を捨てゝ、もはら散文を心懸け、小説あまた作りぬ。皆一種の氣節あり、品格ありて、世の濁りたる文人、世の穢き小説に似ざりければ、二つなき小説とてもてはやされ、それより彼の小説は、世人の愛

Harold the Dauntless　Marmion
Byron　Don Roderick
Rokeby

讀ただならずなりぬ。

スコットは又、其の文のごと、其の筆のごと、心も優にやさしく、道にいさぎよく、あつぱれ世の男兒なりければ、多かる友には、此上なくあはれの者にせられぬ。この文人、この詩家、かなしき事は、人ゆゑにゆくりなく十四萬弗に餘りたる負債を受け、いかにもしてこを償はんと、晩年終日筆をとぎ文を磨き、僅かに返しつくさん時となれば、悲しいかな、魂は故土に歸りて、空しき世の人となりにけり。げに千八百三十二年といふ年九月といふ月、菊の白露、消えがてに見ゆる頃なりき。（雨江全集）

一七　詩人の像に

武島羽衣

○人丸

うしほを海といふ勿れ
雲をみ空といふなかれ
奇しき跡のつくところ
天地籠むる汝がふでの
そこになみたち潮わく
そこにくもゆき嵐ふき

○貫之

げに目もはゆき錦かな
和歌の浦わによる玉藻
げにたぐひなき光かな
土佐のうな路の櫻がひ
拾ひしあまぞ君はこれ
その二くさを殘りなく

○定　家

小倉の山を見わたせば　一しほ千入ときまぜて
みるめあやなる紅葉哉　過ぎしは雲の一むらを
いかに時雨の染分けて　百の色とはなしにけむ

○杜少陵

くろ雲きほふわだの原　斷ちつゝいぶく神風に
百のいかづち摧けきて　沖のあらいそ打さけぬ
知れ諸びとよ是やこの　君が言葉のすがたとは

○バイロン

Hugo
Tennyson
Swinburne

バイロン

ユーゴー

物ぐるほしき海にして　彼がひたひに雲かゝり
彼がかしらに霧おもく
彼が足べに花さけり
彼が心は悲しみと
うれへとうさとみだれたる

○ユーゴー*

テニソン*いへり汝こそは
人の涙のおほぎみと
スキンバーン*もまたいへり

汝がことばは劍ぞと　何か加へんいまさらに
いひ汚すべきわが言を

○ゲーテ

ゲーテ

浮世を障へし雲のはて
ミューズのけはひけぢかくて
美の光明の布くところ
君は飛びゆく想像の
つばさに乗りてよろづ代を
心のまゝにくらすなり

Goethe　Muses

在原業平　阿保親王の子、行平の弟。

紀友則　貫之の姪、古今集の撰者。

紀貫之　醍醐天皇時代の文學者。古今集の撰者。

僧正遍昭　俗名は良峯貞世。

一八　古今集の歌

渚の院にて櫻を見て詠める　在原業平朝臣

世のなかにたえて櫻のなかりせば
春の心はのどけからまし

さくらの花の散るをよめる　紀友則

久かたのひかりのどけき春の日に
しづ心なく花の散るらむ

郭公の鳴くを聞きてよめる　紀貫之

五月雨の空もとゞろに時鳥
何をうしとか夜たゞ鳴くらむ

蓮の露を見てよめる　僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もて
何かは露を玉とあざむく　　讀人知らず

題しらず

龍田川もみぢみだれてながるめり
わたらば錦中やたえなむ　　讀人しらず

題しらず

昨日こそ早苗とりしかいつの間に
稲葉そよぎて秋風の吹く

壬生忠岑
醍醐天皇時代の歌人、古今集の撰者。

寛平の御時后宮の歌合の歌　　壬生忠岑

みよしの丶山の白雪ふみわけて
入りにし人のおとづれもせぬ

題しらず

鹽の山さしでの磯にすむ千鳥
君が御代をば八千代とぞ鳴く　　讀人しらず

題しらず

ほのぼのと明石の浦のあさ霧に
島がくれ行く舟をしぞ思ふ　　在原行平朝臣

在平行平
阿保親王の子。業平の兄

田村の御時に、事にあたりて津の國の須磨といふ處に
こもりはべりける時に、宮のうちに侍りける人につか
はしける

わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に
藻潮たれつ丶わぶと答へよ

病してよわくなり侍りける時　在原業平朝臣

つひに行く道とはかねて聞きしかど
昨日今日とは思はざりしを

題知らず　小野篁朝臣

都いでて今日みかの原いづみ川
川かぜさむし衣かせ山

小野篁　嵯峨天皇時代の漢學者。世に野相と稱せらる

一九　千遍讀

雨森芳洲

舊歳御狀相達し、御返書未だ仕らず候うち、新歳の芳翰又々相達し、忝く拜見仕り候。彌〻御壯固に御重歳なされ候由、欣慰この御事と存じ奉り候、此許相變らず、私儀無爲に罷在り候。兩度共に御佳作御見せ下され、偖々御上京以後、別して御精出され候御事に御座候や、格別に御上達なされ候樣に存じ奉り、珍重之に過ぎず候。詩は「做多・看多・商量多。」と申し候。兎角多く御作りなされ、上手に御なりなさるべく候。商量の字まづは人と相談することを申し候へども、人と相談いたすばかりにては之無く、心を以て心に問ひ、我が心にて思案する事をも商量と申し候。俗話にも、人の申す事を承り、思案致し御返事申すべく候と申し候時は、「待(テ)我商量(シテ)回話(スルヲ)。」と申し候。和韻致し進じ申し候樣に仰せ下され候。此許御逗留中は、一時の御挨拶と存じ、惡詩も作り申し候へども、上方までは恥しく御座候うてのぼせ難く御座候。それ

故和韻をば仕り申さず候、御宥恕下さるべく候。　こゝに一つをかしき話御座候故、書きつけ御目にかけ候、御笑ひ下さるべく候。

去年より繁右衛門抔皆々寄合ひ、歌の會を致し、閒々私其の座へ參り候事も候へば、私にも是非歌をよみ候へと申し候へども、詩は平仄なりと習ひ覺え居り候へど、歌は遂に百人一首の講釋をも承りたる事も御座なく、かな・けり・らむ一つも埒は明き申さず候。　其の上、歌詞とては尙々存じ申さず候に付、古今千遍讀と申す願を心に立て申し候うて、最早百五十遍は昨日迄に讀みおほせ申し候。　今迄の積りに致し候へば、八十四の七月に千遍の數滿ち申し候積りに御座候。

繁右衛門　姓は古川名は方久、對馬の國老。

其の閒に老耄致し候か、又は閻羅王より勾死鬼など遣し申され候はば、仕るべき樣も無之候へども、まづは願を滿し候心に御座候。　右千遍讀み候ひて、さて歌をよみかゝり候心に御座候。　是は壽命の事はわきにのけ置きての分別に御座候へば、さりとはをかしき事に御座候。　併し私最早世閒に望ある者にもなく候へば、かく致し死を待ち候も一奇事と存じ立ち候事に御座候。　此の段書きつけ御目にかけ候は、老人だにかく存じ候事に御座候故、皆樣にも御年少に御座なされ候へば、尙々徒に御暮しなされざるやう申し上げたく、此の如くに御座候。　同志の御面々へ、御參會の節、此の旨御傳へなされ下さるべく賴み奉り候。　申したき事も御

座候へども老筆堪へ難く、早々貴答に及び候。餘は後音を期し候。恐々謹言

二〇　瀧の川　その一

瀧澤馬琴

犬塚番作

足利持氏の近習なる大塚匠作の子なり持氏滅亡の時匠作は春王安王の兩公子を護りて結城氏朝に據り戰敗れて匠作は番作を落ち行かしめ且主君重代の寶刀村雨をわたし時節を待ちて之を主家に返納すべきことを遺訓せり番作は後に氏を犬塚と改む瀧の川の岩屋辨天に祈りて信乃を生む。

*犬塚番作が年來の志願漸く遂げて、寛正元年秋七月、戊戌の日に男子出生し、母も子もいとすくよかに、産室をさむるころになりぬ。「さて兒の名を何とか呼ばむ。」と女房手束に語らへば、手束は且く打案じ、「よに子育てのなきものは、男兒なれば女の子とし、女の兒には男名つけて、やしなひ育つれば恙なしとて、しかする人も稀には侍り。わが夫婦に幸なくて、男兒三人擧げしかど、みな殤子にてなくなりたるに、このたびもまた男兒なれば、ひとしほ心弱くなりて、想ひやりのみせられ侍り。この子が十五にならむ比まで、女の子にして育てば、恙あらじと思ひ侍り。其の心して名づけ給へ。」といへば、番作うちほゝゑみ、「死生命あり、名の咎あらむや。物忌多き世の僻事、いと信けがたき筋なれども、御身が心やりにもならば、世に從ふもわろきにあらず。古語に長きを『しの』といふ。わが子の命長かれと、壽の心もて、その名を信乃と名づくべし。」と。是より手束は信乃が衣裳を、女服にせざるはなく、三四歳のころに及びて、髫髮おくほどにもなれば、櫛さゝせ簪さゝせて、「信乃よ、信乃よ。」と呼びしかば、知らざるものはこの兒を、女の子ならむと思ひけり。

龜篠　番作の姉なり。蟇六を入夫とす。

されば蟇六・龜篠は、この體たらくを見聞く毎に、掌拍ちて冷笑ひ、「凡そ人の親たるもの、男兒を擧ぐるを面目とせざるはなし。然るに武士の浪人が、女の子を願ふはいかにぞや。結城合戰に逃げ後れ、背疵受けしにいたく懲りて、軍といふもの夢にも見せじと、思ひてかくまで戲氣をつくすか。思ひしにます痴者なり。」とさかしらだちて譏れども、合鎚囃すものはなく、なか〳〵に里人等は、信乃を愛して物をとらせ、かたみ代りに抱きとりて、その母の手を助けしかば、蟇六夫婦はいとどしく、妬きこと限りなし。また羨ましくおもへども、龜篠四十にあまるまで子供ひとりもなかりしかば、夫婦頻に談合して、只管養女を索むるに、そが媒妁するものあ

煉馬の家臣　武藏の煉馬氏の家臣犬山道策の女兒。

りて、煉馬の家臣某といふものの女兒、今年僅かに二歳になるを、生涯不通の約束にて養ひとり、濱路と名づけて、分に過ぎたる綺羅を飾らせ、やゝ東西をしる比より、糸竹の技に師を擇みて、萬づあだに養ひたつるに、生れ得たる顏ばせの、人なみなみに立ちまされば、鳶の子に鷹ありとて、女兒を譽むる陰言を、聞く二親はほゝ笑みて、われを嘲るよしを曉らず、位高く富みさかえて、世に威德ある婿ならで、えこそは取らじと誇りけり。

番作が一子信乃は、はや九歳になりしかば、骨逞しく膂力あり、げに尋常なる人の子が年十一二になるものより、身の丈一岌高かるに、なほ女服着せられて、雀小弓に紙鳶・印地打・竹

馬なんど、萬の遊びもあらゝしきまで、おのづから武藝を好めば、番作ます〳〵鍾愛して、朝には里の總角（アルマキ）とともに手習させ、夕には儒書・軍記の句讀を授け、また或時は試みに、劍術・拳法（ケンポウ）を教ふるに、素より好む道なれば、その技の進むこと、親すらしば〳〵舌をふるひて、末頼もしく思ひけり。　さても信乃が生るゝ比、母親手束が瀧の川なる、岩屋詣のかへるさに、將（キ）て來つる狗の子は、信乃と共に大きくなりて、今年は既に十歳なり。　この狗背は墨よりも黑く、腹と四足は雪より白ければ、その名をやがて四白とも、また與四郎とも喚ぶ程に、年來信乃によく狎れて、うちたゝかれても怒ることなく、手に屬き其の意に隨ふにぞ、信乃は與四郎に索靭（ナハダツナ）をかけてうち乘れば、犬は主のこゝろを得て、足搔を早めて幾返りかす。　この童子が體たらく、平人（タヾモノ）にはあらじとて、賞歎するも多かりけり。

二一　瀧の川　その二

さる程に、今年秋の比よりして、手束は心地例（ツネ）ならず、病の床に臥しゝより、鍼灸・藥餌の驗なく、冬の初に至りては、日に日によわるばかりなれば、番作はいとどしく眉うちひらくよしもなく、夜とて安くはまどろまず。　信乃は又あさな〳〵醫師がり往來しつ、藥を進め腰をさすり、四方八方の物語して、母の徒然を慰むるに、思はず涙目に盈ちて、やるかたなき

を見る母は、胸ふたがりて泣き顔を、隱すよしなく、鳩尾(ミヅオチ)を、なでて痞(ツカヘ)に紛らかす。　親子迭に思ふ事、いはねどしるき孝行慈愛、こゝろぞ想ひやられたる。

かくてそのあけの朝、信乃は藥とりにとて、いそしく出でゆきしが、冬の日なれば短くて、はや巳の頃になりしかど、つねにもあらで信乃は歸らず。　渠路草をくふ者にあらず、いかにしつらむと、子を思ふ親の心はおちつかず。　番作は外面(トノカタ)へ出でて見むとて、障子を開けば、思ひがけなく緣側に藥のかよひ筥はあり。　こは訝しと紐ときて、蓋かいとれば藥もあり。　さもこそと片頰に笑みつゝ、件の筥を携へて、いそがはしく裡面(ウチ)に入り、「手束よ、藥は彼處にあり。　いつの程にか信乃は還りて、氣鬱をはらしに出でにけむ、寔に童ごころぞかし。　いかばかり面白き、物見かけてか還りたる。　よしをも告げず又出でたり。」と、いふに手束は稍〻おちゐて、「たま〳〵の事なるに、必ずな叱り給ひそ、還るに程は侍らじ。」といひつつもその顏見ねば、片心にぞかゝりける。　かくてはや、未のあゆみ過ぎにけむ、ひかげ斜になる頃まで、まてども〳〵信乃は還らず。　「よしや遊びに耽れりとも、餓ゑなば興も盡くべきに、物をも食はで何處にをる。　心得がたき事なり。」と、父すらいへば母はなほ、重き枕を幾度か、擧げてながむる外面に、板金剛(*)の音すれば、それかとぞ思ひだまされて、人の足さへ恨みけり。　妻がかこてば番作も、立つて見居て見待ちわ

板金剛　小兒の履物の一種。

びて、思はずも歎息し、「わが足むかしの如くならば、只一走りに走りめぐりて、必ずたづねて將て還らむに、日影短き小六月、夕日を見つゝ杖にすがりて、何地までゆかるべき。さりとて暮れなばいよ〳〵便なし。巣鴨までも。」と一腰を挿して竹杖つきこゝろみ、はや外面に出でむとす。

かゝる處に番作が、背門の向ひなる莊客に、糠助と呼ばるゝもの、右手に一筋の釣竿と、一つの魚籠を携へて、左手に信乃を扶け引き、いそがはしく詣來つゝ、番作と面をあはして、かや〳〵とうち笑ひ、「犬塚氏か。秋の稼ぎもしはてたる、骨休めにわれとわが、一日の暇を給はり、けふは未明にうかれ出でて、神宮川に雜魚釣りくらして、瀧の川をかへり來れば、こ

こなる息子が不動の瀧に、水垢離執りて身は冷え徹り、息も絶ゆべき有樣を、見つけし時は膽潰れて、あわてふためき引出し、そがまゝ坊へ將てゆきつ、藁火に煖め藥をのませ、法師ら諸共に勞ること半時ばかり、初めてわれに復りしかば、湯飯貫うて腹を肥させ、事の故を尋ぬれば、母の大病平癒の祈禱に、水垢離をとりしといふ。十にも足らぬ童には、たぐひ稀なる大孝行、法師らも感心せられて、求めざれども當病平癒の、神符・洗米を給はりぬ。件の瀧は寺へ遠くて、わが外に人しらざりき。寔に危き事なりし。いざ子だからを受取り給へ。暮れかゝればはや罷るなり。病む人によくこゝろ得てよ。要あらば背門口から、竹螺鳴らして呼び給へ。

和子よ、明日は遊びに來よ。この魚炙りてはませむに。」とおのがいふ事いひ誇り、人の挨拶聞き果てず、裡面にも入らで還りけり。

さてはとばかり番作は、我が子の肩を杖に換へ、家に歸りて事の趣をしらすれば、手束は病苦を忘れて、わが子をほとり近く侍らし、「信乃よく物を心得よ。身を危めて怪我あらば、親の歎きはいかなるべき。かくては孝が不孝ぞかし。親いとほしと思ふ子の爲には、祈らでも神は守り給はむ。」と、諭せば信乃は涙ぐみ、「宣ふ所心得侍り。今朝醫師がり赴きて、藥給はりて還りし折、家尊に家母の物がたり、信乃が命の長かれと、勿體なくもわが母は、命を贄に神々へ、祈らせ給ひし驗にや、長きいたつきに臥したまふと、宣はせしを立聞きて、涙にぬるゝ片袖を、泣き聲立てじとかみしめて、緣側についゐたりしが、親の願望驗あらば、わが願望も驗ありなむ。いかで此の身を贄にして、母の命に代らむと思ひ定めつ、年比母の信じ給ふ、瀧の川なる岩屋の神に走りゆきぬ。」と、いひかけて目をおし拭へば、手束はよゝと泣き沈み、「世に子をもたぬ親はなけれど、けふ死するともわが身ばかり、幸あるものはなきぞとよ。八九歳のをさな心に、賢しや親に代らむと、祈る誠を神明の受け給へばこそ、瀧壺の水屑とならで還りけめ。かくまでに命運つよき、わが子の上を見るからに、行末さへに憑もしく、歡ばしさに涙のみ、はふれ落ちて禁めが

たし。母が身にかはらむとて、祈るとも驗あるべき事ならぬに、かへすがへすもよしもなき願立なし給ひそ。」と、涙の隙に諭しけり。さて物の命數は人のよくする所にあらざれば、身を以て代らむと祈る、信乃が誠も感應あらず、母の病は日にまして、十日餘りを經る程に、秋の朝霜ともろともに、睡るが如く息絶えけり。（南總里見八犬傳）

息絶えけり　手束の病死は應仁二年十月下旬にて、享年四十三、番作は其の後三年にして、文明二年の秋、五十歳に滿たずして自殺す。

法皇　後白河法皇。

文治二年　後鳥羽天皇の御代。（一一八六）

建禮門院　清盛の女、安德帝の御母。

大原　山城國愛宕郡大原村、舊大原莊。

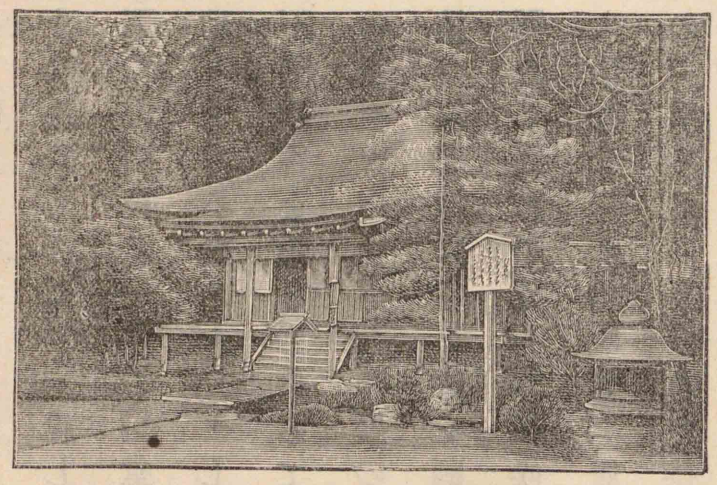
二二　大原御幸

かゝりし程に、法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御住居、御覽ぜまほしう思し召されけれども、二月・彌生の程は嵐烈しう、餘寒も未だ盡きず、峯の白雪消えやらで、

後德大寺　左大將實定。

花山院　大納言兼雅。

土御門　權中納言源通親。



寂光院

かくて春過ぎ夏立ちて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて、大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人々には、後德大寺・花山院・土御門以下公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。

遠山にかゝる白雲は散りにし花の形見なり、青葉に見ゆる梢には春の名殘ぞ惜しまるゝ。

頃は卯月二十日あまりの事なれば、夏草の茂みが末をわけ

入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人跡絶えたる程も思し召し知られてあはれなり。

西の山の麓に一宇の御堂あり、即ち寂光院*これなり。舊う造りなせる泉水・木立、よしある樣の處なり。「甍破れては霧不斷の香を燒き、扉落ちては月常住の燈を挑ぐ。」とは、かやうの處をや申すべき。　庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦を晒すかとあやまたる。中島の松に懸れる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉交りの遲櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹さき亂れ、八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、君のみゆきを待ちがほなり。　法皇これを叡覽あつて、かうぞ遊ばされける。

寂光院　大原村大字草生にあり。

池水にみぎはの櫻ちりしきて
　波の花こそさかりなりけれ

舊りにける巖の絶間より落ちくる水の音さへ、ゆゑよしある處なり。　綠羅の垣、翠黛の山、繪にかくとも筆も及び難し。　扨女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦・朝顏這ひかゝり、しのぶ交りの忘草、「瓢*簞屢空し、草顏淵が巷に滋く、藜藿深く鎖せり、雨、原憲が樞を濕す。」ともいひつべし。　杉の葺きめもまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る月影に爭ひて、たまるべしとも見えざりけり。　後は山、前は野べ、いさゝを笹に風騷ぎ、世にたゝぬ身の習として、憂き節しげき竹柱、都の方の音づれは、閒遠に結へるませ垣や、僅かに言とふ者とては、峯に木

瓢簞屢々空し云々　和漢朗詠集の句。

傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらが音づれならでは、まさきのかづら青つづら、くる人稀なる處なり。

法皇、「人やある、人やある。」と召されけれども、御いらへ申す者もなし。やゝありて老衰へたる尼一人參りたり。「女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。」と仰せければ、「この上の山へ花摘みに入らせ給ひて候。」と申す。「さこそ世を厭ふ御習といひながら、さやうの事に仕へ奉るべき人もなきにや、御痛はしうこそ。」と仰せければ、この尼申しけるは、「五戒十善の御果報盡きさせたまふによりて、今かゝる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行に、なじかは御身を惜しませ給ひ候べき。」とぞ申しける。この尼の有樣を御覽ずれば、身には絹・布のわきも見えぬものを結び集めてぞ著たりける。あの有樣にてもかやうのことを申す不思議さよとおぼしめして、「抑、汝は如何なる者ぞ。」と仰せければ、この尼さめざめと泣いて、しばしは御返事にも及ばず。やゝありて涙をおさへて、「申すにつけて憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女、阿波内侍と申すものにて候なり。母は紀伊二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬるほど思ひ知られて、今更せむ方なうこそ候へ。」とて袖を顏に押しあてて忍びあへぬさま、目も當てられず。

法皇、「げにこそ汝は阿波内侍にてあなれ。御覽じ忘れさせたまふぞかし。何事につけても只夢とのみこそ思し召せ。」

紀伊二位　信西の妻朝子。

とて、御涙せきあへさせたまはねば、供奉の公卿・殿上人も不思議のこと申す尼かなと思ひたれば、ことわりにて申しけりとぞ各〻感じあはれける。

さて女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子をひきあけて叡覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲を懸けられたり。左に普賢の畫像、右に善導*和尚並に先帝*の御影をかけられたり。蘭麝の匂にひきかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。さて傍を叡覽あるに、御寢所とおぼしくて、竹の御竿に麻の御衣、紙の衾なんど懸けられたり。さしも本朝・漢土のたへなる類、數をつくしし綾羅・錦繡の粧、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させたまへば、供奉の公卿・殿上人も、まのあたり見奉りしことども今のやうに覺えて、皆袖をぞしぼられける。

善導和尚　唐の名僧。
先帝　安德天皇。

やゝありて、上の山より濃き墨染の衣著たりける尼二人、岩のかけぢを傳ひつゝ、おり煩ひたる樣なりけり。法皇「あれはいかなる者ぞ。」と仰せければ、老尼涙を抑へて、「花筐臂にかけ、岩躑躅とり具して持たせたまひて候は女院に渡らせたまひ候。爪木に蕨折りそへて持ちたるは、鳥飼中納言維實が女、五條大納言行綱の養子、先帝の

建禮門院

大納言典侍局　平重衡妻。

乳母、大納言典侍局。」と申しもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿・殿上人も皆袖をぞ濡されける。女院は「世を厭ふ御習といひながら、今かゝる有様を見えまゐらせむずらむはづかしさよ。消えも失せばや。」と思し召せどもかひぞなき。宵々ごとの閼伽の水、むすぶ袂もしをるゝに、曉起きの袖の上、山路の露もしげくして、しぼりやかねさせたまひけむ、山へも返らせたまはず、又御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましましたる處に、内侍の尼參りつゝ、花筐をば賜はりけり。

「世を厭ふ御習、何か苦しう候べき。早々御見參ありて、還御なし參らせ給ひ候へ。」と申されければ、女院御涙を抑へて御庵室に入らせおはします。「一念の窗の前には攝取の光明を期し、十念の柴の樞には聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思の外の御幸かな。」とて御見參ありけり。（平家物語）

二三　平重盛論　その一

高山樗牛

小松内府重盛は、げに智仁勇兼備の大臣なりき。此の點より見れば、彼は平家第一等の人物といふべかりき。唯理に明かなるに較ぶれば、その意は寧ろ弱く、その情は寧ろ脆かりき。彼がその材能を發揮して遺憾なからんが爲には、少くとも更に數層の强烈なる意志を要したりき。加ふるに早く佛説に歸依して現世の無常を觀ぜしが爲に、奉公の大

義に於て聊か缺くる所あるを免れず。此の人にして此の弊あり、洵に惜しむべし。

四十三年の齡は、重盛に於て決して短きものにあらざりき。平家の興るや彼實に其の樞軸たり。平家の榮ゆるや彼實にその柱石たり。彼の一生は、其の父入道と共に平家史の大半を語るものなりき。清盛心剛に情强く、眞に一世の豪傑なりしかど、其の事をなすに當りて重盛に待たざること殆ど一度だにもあらざりき。戰陣に臨みては危きを矢石の間に救ひ、帷幄に參しては籌を百里の外に運らし、世靜まれば儀禮彼に於て備り、道衰ふれば大義彼によりて正されき。彼は啻に平家一門の柱石たりしのみならず、又世道の

惡源太義平　源義朝の長子。

信賴　藤原氏、平治の亂の首魁。

儀表たり、君國の宗師たりき。藤氏衰へてより世に人傑なし、而して重盛實に其の人傑の第一人なりき。

*惡源太義平と紫宸殿の階下に鬪ひし重盛は、如何に勇ましかりしよ。彼、武藝に於て人後に落つる者に非ざりき。*信賴、平家の不在を窺うて亂を起すや、熊野參詣の途上にありし清盛を始め平家の一族は、寧ろ西國に走りて再擧を圖らんと欲したりき。かの時平家にして直ちに都に歸らざりせば、天下の事ほゞ知る

平重盛

べきのみ。此の時に當りて衆論を排して入京を主張し、大義名分を唱へて士氣を鼓舞したるは實に重盛なりき。されば平治の戰功を論ずれば、當に功一級たるべき者は實に重盛たり。唯この一勝あり、平家の勢は宛ら蛟龍の雲に乘じたるが如きものありき。されば此の氣運を致したる重盛こそは、正しく一門興隆の開山とも稱すべけれ。世は既に平家の世となりて、四海の權柄入道が掌裏にあり。重盛が天分益〻其の高きを加へぬ。今や彼一武人に非ずして、朝廷の輔弼たり。公私・內外の間に處して君國の大事を辨ずべき者、實に彼を待つて始めて人ありき。其の男資盛、攝*政の儀仗を冐して辱められし時、入道は大いに怒りて暴慢の

攝政　藤原基房。

復讎を試みしが、重盛は深く慚愧し、資盛を放つて世に謝しき。鹿*が谷の事ありて成*親の斬られんとせし時、一國の重臣、私門の成敗に任ずべからざるを說破せしも重盛なりき。事延いて法*皇幽閉の擧あらんとするや、四恩の妙理を引いて君臣の大義を訓へしもの亦重盛なりき。入道が我執の一念は幾度か是が爲に沮まれて、君國の事、ために僅かに安らけきを得たり。かゝる間に忠孝の兩全を期し、公私の事無きを謀れる重盛が心事の如何ばかり苦しかりしかは、察するに餘りありといふべし。あはれ、入道が榮華は壯大極りなかりしが、其の裏面には其の愛子を犧牲とせる慘澹たる悲劇ありき。重盛年なほ壯にして、夙に厭世の心を動か

鹿が谷の事　平家討滅の密議。
成親　藤原氏。平氏討議の首唱者。
法皇　後白河法皇。

し、早く佛説に歸依して、來世を希求せしもの、際遇の自ら然らしめし所その情や深く憐むべしとせん。

二四　平重盛論　その二

高山樗牛

然れども此の佛説に歸依せる事は、重盛にとりては寧ろ恨事なりきと謂はざるを得ず。彼、身は一國の大臣として奉公の大義を辨ずるもの、宜しく忠を勵み道を盡し、斃れて後已むべきなり。洵に忠孝兩全し難くして、骨肉の私情さすがに絶ち易からざれど、事體の大小、云爲の先後、必ずしも辨じ難からず。何ぞ妄りに一身の安慰を冥々の後にのみ求むべしとせん。此の難關に當りて能く功を擧ぐるもの眞

に人傑といふべきなり。重盛たるもの、輕々しく事局を回避して、自ら全うすべからざりしなり。彼の熊野に禱る詞を見るに、要は一門の榮華、永きを保たじ、寧ろ死して其の末路に遭遇せざらんと謂ふにあり。何ぞその願の私情に拘ることの多くして、公義に盡すことの少きや。彼の一身は公私内外の望の由つて繫る所、君は以て泰きを得、父は以て正しきを得、洵に一門の柱石、一世の儀表たり。彼死せば、入道が暴横はさながら悍馬の御に離れしが如けん。帝座の危きや知るべきなり。彼死せば、一家の望立ちどころに世に離るべし。一旦事あらん日、誰か能く擁護の任に當るべき。一門の危きや亦知るべきなり。重盛已に一身を以て

この大局を保持し、居然としてその重きに任ず、何ぞ區々の私情のために逃避すべけんや。重盛その曠世の聰明を以てして如何ぞか計りの理義を辨ぜざらん。辨じて而してなほ之を敢てせざるものは、其の佛説に歸依したるの致すところと謂はざるべからず。是、重盛にとりて一大恨事に非ずして何ぞ。

世の忠孝の龜鑑として重盛を論ずるものは、吾人の同意する能はざるところなり。其の情や誠に憐むべし、其の行や則ち大いに未だし。殊に平家盛衰の側より見れば、自ら求めて其の身を殺したるは、則ち自ら求めて其の家を亡したるに等し。入道心剛なりと雖も齡すでに耳順を越ゆ。其

耳順　六十歳の事論語に「六十而耳順」。

の身後に於て誰か一門統率の任に當るべき。凡庸宗盛の輩の素より爲すなきこと、重盛の明を待つて知らざるなり。加ふるに諸國の源氏外に機を窺ふあり、院宣一たび下らば天下の事俄かに知り難し。重盛此の危機に際して何ぞ自ら重んぜざりしか。文覺の賴朝に説ける言に曰く、「平家には小松の大臣殿こそ心も剛に謀も勝れておはせしか。平家の運命茲に極れるか、去年の八月薨去せられぬ。今は何の憚るところぞ。御邊一たび起つて麾かば、天下靡然として從はん。」と。平家の存亡一に重盛の上に懸りしこと亦以て想ふべきにあらずや。あはれ、世は如何にもなりなん、唯力を盡し忠を勵みてもなほ及ばざらん時、かねて亡き身の

文覺　俗名遠藤盛遠。賴朝に擧兵を勸む。

せん術なからめや。さるを君父を捨て、門下を去り、偏に一身の安慰を未來に祈願せるこそ心得ね。吾人こゝに至りて遂に重盛を辯護する辭を知らざるなり。（樗牛全集）

二五　白石と宣長

上田萬年

新井白石と本居宣長とは、共に德川時代を飾るに足る偉人なり。而して白石の歿せるは享保十年にして、宣長の生れたるは其より六年の後にあり。この均しく日本國民の誇るを得べき兩偉人の間に存する著しき類似と甚だしき差異とは、吾人の考究に値するものあるべし。

まづ漢意（カラゴコロ）を排して國學を復興せん事は、既に早く白石の唱

享保十年　中御門天皇の御代。八代吉宗の時。（一七二五年）

へたる所ならずや。白石は漢文が我が國語の發達を妨げたるを論じ、大いに之を悲しみたり。白石は漢學者なり、しかも主客の別を辨へたる漢學者なりしなり。この點より見て、宣長は其の友谷川士清（コトスガ）と共に、大いに白石に負ふものありといはざるべからず。なほ其の事業の多面多趣なること、敏腕なる外交家として、歴史家として、詩人として、さては西兩者の間に著しき類似をなせり。綿密なる財政家として、

本居宣長

洋學の鼻祖、卓見に富みたる語學家として、驚くべく多能多才なる白石は、皇學及び神道を中心として、神學者として、歴史家として、又一個の語學家として、而して又たとひ秀拔せる地位を有し得ざるにもせよ、歌人として、文學批評家としての宣長と、兩々相對して我が學界に異彩を放てるにあらずや。しかも此の兩偉人を比較して殊に予輩の趣味を感ずるものは、蓋し他の一方に於て、奇怪にも多くの反對若しくは差異の點を認め得るによるなり。今これらの點を述べんとするは、單に興味ある事業たるのみならず、同時に又その眞面目を發揮するに必要なればなり。

白石と宣長との間に存する反對の點は、第一に、白石の峻嚴秋霜の如きに對し、宣長の溫厚春風の如きにあり。一方は廟堂に立ちて堂々の議をなし、君の忌諱にふれて毫も顧みざるに、一方は庵を結び、鈴*を鳴らして從容自適す。性格の差異驚くべきにあらずや。第二に、白石が弟子を遺さざりしに反し、宣長は全國に門弟を有し、享*和年間に至りては其の數四百九十人、六十六國中弟子の無きはたゞ二個國なりといふ。第三に、白石は政治上の偉能あり、宣長は此の側にては殆ど無能なり。性格と時勢とは自ら此の如くならしめたるなり。第四に、兩者は均しく博學多識なれども、白石は事物の實質に立入りて、創始を喜び、啓發を事とせるに、宣長は考證を基とし、既成の事物を綜合組織するに長ぜり。

鈴を鳴らし　宣長は書齋に鈴を懸け之を鳴らして氣をさわやかにせり。因つて鈴の屋と號す。

享和年間　光格天皇の御代、十一代家齊の時。（一八〇一―一二）

讀史餘論を見よ、東雅を見よ、東音譜を見よ。前人を拔出づる白石の創始的才能は明かに見るを得べし。之に反して、記傳を見よ、玉の緒を見よ、三音考を見よ。前代及び其の同時代の學問は偉大なる手腕の下に統一せられて、後世發達の基礎の茲に置かれたるを知らん。第五に、白石は理を本とし、宣長は信仰を本とせるを見る。一方は科學者なり、一方は少くも或度までは宗教家なり。彼は韓語・梵語・宋・元の音、進んでは西南洋の蕃語までが、國語の中に侵入したるを說き、此は鼻音を排し、半濁を說き、溷濁なる外國音の清純なる國音を侵す能はざるを說く。

第六に、白石は實地の日本に向ひ、宣長は理想の世界に進み

古河侯　堀田正俊。
甲府侯　德川家宣。

入らんとす。讀史餘論・藩翰譜・折たく柴の記を讀んで、記傳・玉勝間に及べば、著しく逕庭あることを感ずべし。第七に、一は伊勢の如き平和の地に生れて徐かに其の學問を發達せしめ、一は江戸の如き混雜の渦中に投じて世と戰へり。第八に、其の生涯の徑路に大いなる差異ある事は、いはでもあるべし。土屋侯の一足輕の子として人を驚かしたる幼年時代と、失意に滿ちたる中年時代とを送りたる後、古河・甲府二侯に歷仕し、忽ちにして天下の大事に參與し、榮譽寵遇を極めたりしも、六十一歲時勢の變に遇ひ、一朝にして榮辱地をかへ、寂しく晩年を送りたる白石と、幸福なる木綿問屋の息子として十分の普通教育をうけ、書を好むが故に醫を學

紀州侯　徳川治寶。

山室山　宣長の郷里松阪町の西南なる花岡村にあり。

ばしめられ、紀州侯の奥殿に奉仕して靜かに好學の心を養ひ、家には二男三女を擁し、遂に山室山に千歳の春を樂しめる宣長と、驚くべき境遇の差異は、又その性格に差異を生じたる一の原因なるべし。

白石と宣長とは、性格境遇の差異此の如く大いなれども、均しくこれ日本の人傑にして、同一の大いなる天才が兩個の極端に發達せる好例を遺せるものと謂ふべし。

大正國語讀本（修正版）卷七終

大正五年十二月廿二日訂正印刷
大正五年十二月廿五日訂正發行
大正七年九月廿六日修正印刷
大正七年九月三十日修正發行
大正七年十二月十二日修正再版印刷
大正七年十二月十五日修正再版發行

大正國語讀本修正版
全拾冊

定價
卷一・二　各金三拾四錢
卷三・四　各金三拾五錢
自卷五至卷十　各金三拾錢

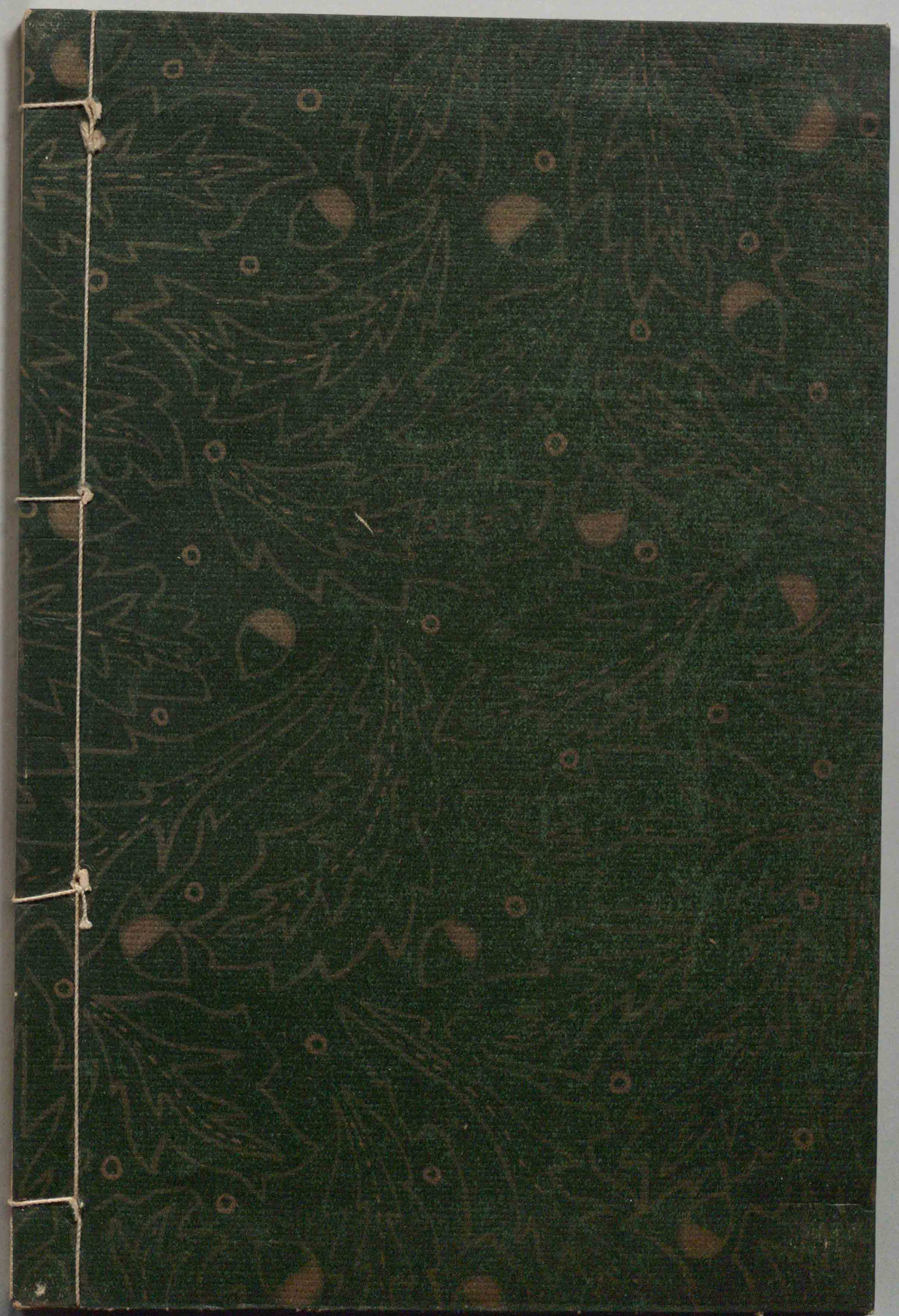
著作權所有

著作者　東京市麹町區土手三番町三十六番地　保科孝一

發行者　東京市牛込區白銀町貳拾番地　合資會社育英書院　右代表者　目黑甚七

印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十七番地　佐久間衡治

印刷所　株式會社秀英舍

發行所　東京市牛込區白銀町二十番地　振替口座（東京）七四二番　合資會社育英書院

發賣所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　振替口座（東京）二八〇九番　目黑書店